光と闇のはざまに

織倉正美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光と闇のはざまに

【Ｎコード】
Ｎ８５０５Ｚ

【作者名】
織倉正美

【あらすじ】
ファンタジーのボーイ・ミーツ・ガールものです。
神々の争いに巻き込まれる主人公とヒロインの運命を描いています。

序

「ネルセ・レアディ……おまえからからわざわざ俺を誘ってくれるなんて珍しいな。どういう心境の変化かな？」

そう言って悪戯っぽく笑う黒髪黒瞳の青年を見返して、ネルセ・レアディは深々とため息をついた。

人選、いや神選を誤ったかもしれない……。

しかし協力してくれそうな神のうち、彼以上に力を持つ者はいないのだ。

「イフェ・ラディアス、あなたに頼みたいことがあるんだ。実は……」

「リ・スファノアの馬鹿野郎が、気違いじみたことを企ててるから、それを隠密裏に処理する手伝いをしてほしいっていうんだろ？」

みなまで言わせずネルセ・レアディの言葉を継いでみせて、その驚きの表情を楽しみながら、黒髪黒瞳の青年……イフェ・ラディアスは静かに笑った。

「あなたは……知ってたのか……」

「俺は『耳がいい』からな……。たいていのことは知ってる。なにか、知りたいことがあったら聞きにくるといい。おまえにならなんでも教えてやるよ」

「それなら話は早い……。彼の企ては危険だ。私に力を貸してほしい」

「やだね」

イフェ・ラディアスは、小馬鹿にしたように言うと意地悪く笑った。

「そんな面倒なことを何で俺が手伝わなければならないんだ。そんなことはリ・セスティスにでも頼めばいい。あいつは真面目だし、おまえに惚れぬいてるから喜んで力を貸してくれるだろうよ」

できることならそうしている……。それができないから、こうし

て、こんなやつに頭を下げているのだ。
少年とも少女ともとれる、あるいはその両方でもない繊細な美貌を怒りにふるえさせながらも、ネルセ・レアディはつとめて平静に答える。
「セスティスに頼めばことは隠密裏ではすまなくなる。下手をすればすべての界を巻き込んだ戦乱になりかねない」
「確かに。あいつは真面目だけど融通なんてものは全く利かない石頭だからな。少なくともスファノアの阿呆に決闘を挑むくらいのことはやってのけるだろうな」
神同士の決闘！？　それだけでも界のひとつやふたつに、致命的な天変地異を起こしかねない。
「解っているのならふざけないでくれ！　こんなことを頼めるのはあなたしかいないんだ。だから……」
「なかなか頼み方がうまいじゃないか。確かに俺が協力すれば、あいつの企てを隠密裏に葬り去ることも可能だろうな。まあ、おまえがそこまで言うなら引き受けてやらんこともないが……」
ネルセ・レアディは相手の言わんとすることを察し仏頂面で言葉を継ぐ。
「条件次第ってワケか」
「そういうことだ……条件といってもたいしたことじゃない。おまえ、もう何か策は立ててあるのか？」
イフェ・ラディアスの問いに、ネルセ・レアディはぐっと言葉を詰まらせる。
何も考え付かなかったからこそ助力を求めに来たのだ、なんて言えない。
「そんなことだろうと思ったよ。まあそれならちょうどいい。俺の条件はただひとつ、この件の処理に関して俺に立てた策に従うこと、それだけだ」
イフェ・ラディアスの意外な言葉に、ネルセ・レアディは思わず怒りを忘れて問いかける。

「何か、いい策があるのか！」
「ああ……とっておきのがな。おまえはただ、自らの力のかけらをふたつ用意すればいい。核に使うだけだから、それほど大きなものでなくてもかまわん。それさえ用意してくれれば、後はこっちですべてけりをつけてやる。どうだ？　そちらにとってもかなりいい条件じゃないか？　我ながら気前のいいことだと思うがな……」
　確かにいい条件だ。かけらを渡すのは危険だが、小さい物がふたつ程度なら、悪用するにしても、たいしたことはできないはずだ。
　だが、あまりに話がうますぎる。何か裏があるに違いない。
「私のかけらをふたつ……それを核にしていったい何に使うんだ？」
「媒介に使うのさ。それを利用して奴の崩そうとしている均衡を支えようってわけだ。残念ながら属性の違う俺の力を奴に気付かれずに送るには、それが必要なんでな」
「なるほど。私の力をつかって自分の勢力範囲を広げようって魂胆だな。そのついでに均衡も支えてくれるってわけだ」
「御名答……まどろっこしいけど、それが一番いい方法だろう。違うか？」
　つまりは以前からネルセ・レアディが助力を申し出るのを予想していて、それを利用することを考えていたに違いない。
　最初から引き受けるつもりでいながら、こちらをからかっていたのだ。
　しかし、そういうことなら逆に信用してよさそうだ。イフェ・ラディアスは食えないヤツだが、少なくとも自らの利益がからむ時は、約束を破ったことはない。
「わかった。かけらは明日までに用意する。目的を果たせるのなら好きなようにつかってくれ」
「オーケー。これで契約成立だな。まあ適当に期待して待っててくれ」
　そう言ったイフェ・ラディアスの瞳が、一瞬、悪戯っぽく光ったことに、ネルセ・レアディは気付かなかった。

零章

下弦の遅い月が、地平線から顔をのぞかせた。
月光は淡い。
しかしその淡い月光は、ふたりの姿を追跡者へと示した。
追跡者の長は狡猾な笑いを浮かべると、部下に合図を送り、巧妙に退路をふさがせる。
そして自分は、ゆっくりとふたりの方へと向かった。
「姫君……ここまでですな。あなたは裁きを受けねばなりません。その邪悪な闇の使徒とともに、偉大なる光神へ、その汚れた魂を捧げなさい。さすれば、あなたの罪は浄化され、再び光のもとへと還ることができます。姫君……神は慈悲深い。あなたのように汚れきった存在でさえ救ってくださるのです。さあ、その邪悪な闇の使徒を神へと差し出しなさい」
「この子は……ルアークは私の息子です。そしてあの方の……私を救ってくれたあのひとの息子です。この子は渡しません。たとえ魂が滅びても、私はこの子を護ります」
姫と呼ばれた、まだ年若い美しい女性が、決然と言い放ち、我が身を盾にして息子をかばう。
「どうやら完全に魔に魅入られてしまっているようですね。自ら神のもとへ赴く気がないのなら、私が送ってさしあげましょう。さあ姫君。浄化の光に導かれ、神のもとへと旅立ちなさい！」
追跡者の長はそう言って、手に持っていた宝玉を掲げた。
その一瞬後、宝玉は目が眩むほどの閃光と化し、光の奔流となって母子を襲う。
「くっ……」
浄化の光などではない。破壊と殺戮の光がふたりを包みこもうとした瞬間、辛うじて間に合った防御結界が、何とか光を押しとどめる。

「ほほぅ……さすがはかつて、巫女王の後継最有力候補だっただけのことはありますね。しかし、これではどうですかな？　……そぅれ」

そう言うと男は、輝く宝玉を虚空へ放り投げた。

宙に浮かんだ宝玉から、さらに光がほとばしり、ふたりに殺到する。

だめ……このままでは……。

結界は、もういくらも持ちそうにない。覚悟を決めるときが来たようだ。

何としても……この子だけは、助ける！

彼女は心を決めると結界を解除し、自ら光の奔流へと身を投げた。

全身を光に焦かれながら、その光の魔力を取り込み、息子へと集中させる。

「母上！」

息子の悲痛な叫びを耳にしながら、彼女は転移の呪法を完結させた。

生きて……ルアーク。

「ははうえー！」

ルアークの絶叫が響き、彼がいずこへかと消えた瞬間、光がすべてを舐め尽くす。

そして……虚無があたりを支配した。

一章

何かに操られながら、フィルデラは進んだ。
封邪の間。
その凝縮された力はどのような存在でも捕らえ、自由を奪うことが出来る。
フィルデラは無意識のうちに扉を開くと、その恐るべき牢獄に捕らえられた哀れな生物と対した。
「私を呼んだのはあなたなの？」
本来はこの程度の力に縛られる彼女ではない。
操られるように行動しながらも、フィルデラは自らの意識を失ってはいなかった。
その導きの力が持っていた悲痛な願いを察して、自ら操られたのだ。
導きの力の主……暗黒竜もそれを理解したのだろう。フィルデラの質問に肯定とともに感謝の意志を含ませて答えた。
「何がお望みなの？　……逃がしてあげることはできないけれど、それ以外で私にできることなら、かなえてあげられるかもしれないわ」
フィルデラは慎重に言葉を紡いだ。
この生物は邪悪なものだ。いや、そうであるはずだ。
しかし、この生物と実際に意識をふれあわせてみて、この生物が自分が今まで思っていたような邪悪な存在では決してないと、フィルデラは感じた。
だが、気を許すべきではない。
もしかしたら、この生物が真に邪悪な存在であるがために、フィルデラの感覚がごまかされているのかもしれないのだ。
そのフィルデラの疑心が伝わったのか、その生物は苦笑したような心理イメージを発した。

逃げるつもりはない……。逃げようとしてもそれだけの力が自分にはもう無い。
その心理イメージから、彼が――いやこの竜は女性だ――彼女が既に、肉体も精神も、ぼろぼろに傷つけられていることを理解して、フィルデラは怒りを感じた。
彼女がまだ生きていられるのは、この封邪の間の持つ、強力な呪縛のためでしかない。
この残酷な呪縛は、捕らえた生物にたいして、死による開放さえ許さないのだ。
この邪悪な生き物は浄化され、汚れなき魂へと昇華させられるために捕らえられたのではなかったのか？
少なくとも、このような残酷な責めを受けるためでは無かったはずだ。
たとえ彼女が真に邪悪な存在であったとしても、これは許されることではない。
「だれが……だれが、あなたにこんなことをしたの？」
フィルデラは知らなかった。この質問が、自らの運命を変えたことを。
黒竜は思念を返した。
おおきな、おおきな存在。光に満ちた存在。
それが私を傷つけ、魂を食らうのだと。
光り輝く、巨大なイメージ。
その存在のことをフィルデラは知っていた。
それは、神。
少なくともほんの少し以前までは、フィルデラにとってそれは偉大なる正しき神だった。
そう……ついさっきまでは。
真実が静かにフィルデラの意識の中に染み込んでいく。
彼は確かに神以外の何者でもない。
しかし、彼は本当に正しいのだろうか？

彼の無謬を信じた自分は本当に正しかったのだろうか？
光に満ちていること＝正義。
暗黒＝邪悪。
この等式は本当に成り立つのだろうか？
これまでに幾度となく感じていた疑問　。
その解答がここにあった。
フィルデラの中で、何かが音を立てて崩れていく。
信じたかった……。信じていたかった。
神の正しさを、そして、自らの正しさを。
しかし……フィルデラにとって正しかった神は、この竜にとっては邪悪な忌むべき存在なのだ。
真に正しきものなどあり得ない。
それは神においても例外ではないのだ。
真実を知った以上、フィルデラには自らをごまかすことは許されない。
もう何も知らなかったころには戻れない。
フィルデラには、神が、そして自分達が、完全な正義であると、もう信じることができなかったのだ。
心は、決まった。
「あなたに力を貸すわ……なにを私に求めているのか、教えて」
竜が小さくうなづくと、虚空に突然、こぶし大の黒い物体が現れた。
フィルデラは、胸にそれを受け止める。
この子を、お願いします……。
必死になって神から隠していたのであろう。命を削って造りあげた結界の中に、彼女は卵を隠していたのだ。
「必ず……必ず護ってあげる。だから安心して」
そう、問いかけてフィルデラは、彼女の魂には、もう返答を返す力も残っていないことに気が付いた。
「あなたの想い……必ずこの子に伝えてあげるわ」

あふれ出る涙をぬぐおうともせず、フィルデラは決然として、この残酷な牢獄を後にした。

※

新月の闇の中、この光の神殿には彼以外に動くものはない。
今日を選んで正解だったな……。
光神殿に仕えるものにとって、今夜は禁忌の夜。何人たりとももも出歩くことは許されない。
普段なら、潜入することなどとうてい不可能なここも、この夜だけは何とかなるかもしれない。
そう思って、あせる気持ちを抑えて時を待ったのは、正解だったようだ。
失敗は許されないからな……。
大切な……大切な、存在。
今、こうしてここに自分があるのは彼女のおかげなのだ。
母を失った自分をここまで育ててくれた彼女。
もうこれ以上、自分にとって大切な存在を失うのはごめんだった。
……見つけた
さすがに光神殿の総本山だけあって、その結界の堅固さは並みたいていではなく、これまでは彼女の気配をつかむことさえできなかった。
だが、やっとそれが見つかった。ルアークは安堵に小さくため息をついた。
いや……まだ本番はこれからだ。
ルアークは緩んだ気を引き締め、広い神殿の中を、気配を消しながら慎重に進んだ。
ここを……左。
術で探るが何もいないようだ。
よし……。

ところが、そこを左折すると、突然目の前に人影が現れたのである。
しまった……待ち伏せか！
恐慌に陥りそうになる自分の心を叱咤し、目の前の人影を見極める。
金色の髪、同じく、金色の瞳。
闇のなかにあっても輝くような美しい少女が、驚きに目をみはってこちらを見ている。
まずい……！
ルアークは、今にも悲鳴をあげそうな彼女の口をすばやくふさぐと、耳元に小さくささやいた。
「叫ぶな……騒ぎになったら、そちらもやばいんじゃないのか？」
今夜は禁忌の夜。
巫女であるらしいこの少女が出歩くことは、絶対許されないはずなのだ。
その予想は当たった。
恐慌に陥りかけたらしい少女は、すぐに冷静さを取り戻し、小さくうなずいたのだ。
「あなたは誰？　……ここには、何しに来たのですか？」
たずねる少女の首筋に、ルアークは短剣を突きつける。
「おまえにたずねる権利はない……。こちらの言うことに従ってもらおう」
ルアークが、できるだけ冷たい口調でそう言うが、少女はひるまない。
「もしかして……あなたは、盗賊さん……ですか？」
いちいち盗賊まで“さん”付けで呼ぶところが、この少女の育ちの良さを示しているのだろうか？
「ああ……似たようなものだな」
毒気を抜かれて憮然とした表情で答えたルアークに、少女はにっこりと微笑みかける。

「あの……それでしたらお仕事のついでに、私をここから連れ出してはもらえないでしょうか？　あっ、もちろんその代わりにお仕事を手伝わせていただきます。私、宝物の管理係をしてたことがありましたから、宝物庫なら御案内できます」
可愛い顔をしてるのに可哀想に……。ちょっと頭が弱いのだろうか？
まあ、せっかく手伝ってくれるって言うのだから、せいぜい利用させてもらおう。
ルアークは一抹の不安を感じながらも、うなずいて、少女に肯定の意を示した。
「よかった……ここを出ることに決めたものの、どうやって結界を抜けようか、途方にくれてた所だったんです。盗賊さん……よろしくお願いします」
そう言って、嬉しそうに微笑む相手に、短剣を突きつけてるのが馬鹿らしくなって、ルアークはそれをふところにしまった。
「こちらです……ついて来てください」
少女は、ルアークの肩を引っ張って、宝物庫の方に案内しようとする。
「いや……俺の目的は宝物じゃないんだ……。きみは、このあいだ捕まった黒竜が、どこに捕えられているか知らないか？」
ルアークのその質問に、少女は驚いて目を見張った。

※

このひと……いったい？
いきなり目の前に彼が現れた時は、自分が神殿を抜けだそうとしているのが、ばれたのかと思った。
だがよく見てみれば、現れた青年の髪は黒っぽい茶色、瞳は黒で、光の要素がほとんどなく、神官ではありえない。
次に、盗賊……だと思った。

だがこの青年――いや、よく見れば年は自分とそんなに違わなく、青年と呼ぶには若すぎる、かといって少年と呼ぶには大人びている――は、宝物が目的ではないと述べ、さらには、あの、黒竜のことをたずねてきたのだ。

できるだけ感情を表すまいと抑えた表情に、必死の想いがにじみでている。

このひと！　あの黒竜さんを、助けに来たんだわ！

「あなたは……彼女のお知り合いなんですか？」

フィルデラの質問に、青年は思わず声をあげる。

「教えてくれ！　彼女は……エメラークは無事なのか？　そして、どこに居るんだ……。教えてくれ！」

この青年にとってあの竜は、本当に大切な存在なのだ。

彼の純粋な想いにうたれて、フィルデラは力なくうつむいた。

「あの方は、エメラークさんっておっしゃるんですね……。いま、彼女は封邪の間という場所にとらわれています」

「そうか……良かった、無事だったんだ……」

フィルデラの言葉に、青年は安堵の表情を浮かべた。

その嬉しそうな表情が、フィルデラの心をさらに暗くする。

どうすればいいのだろう……。

確かに、まだあの暗黒竜は生きている。だが、彼女を救うことはもう不可能だ。できるものならば、フィルデラが自分でやっている。

その事実は、彼を打ちのめすだろう……。

だが、告げなくてはならない。フィルデラは悲痛な表情で、言葉を紡いだ。

「ですけど……彼女を救うのは不可能です。もう、彼女には逃げるのに耐えうる体力も、精神力もありません。肉体も魂も、神によってぼろぼろにされてしまってるんです。あんな……あんなひどいことって……」

思い出すだけで目頭が熱くなる……。あんな状態になっても、彼女は全てをかけて、卵を護ったのだ。

「まさか……。うそだよな……？」
青年の問いに、フィルデラはかぶりを振った。
「そんな……」
青年はがっくりと肩を落とし、力なく床に膝をついた。
握った拳を床に打ちつけ、きっとフィルデラを睨み付ける。
「エメラークがいったい何をしたって言うんだ！　邪悪な暗黒竜？　よくもそんなことが言える！　きさまらが彼女の何を知っているというんだ！　光に満ちていれば何をしても正しいというのか？　闇に属するものはみな、邪悪で、浄化されなければならないのか？　平和に暮らしていた彼女を狩りたてて捕らえ、いたぶるのが正義の行いなのか？」
彼の怒りは正当だ……。
血を吐くような青年の言葉が、フィルデラの心を切り刻んだ。
「エメラークの所へ案内しろ！　封邪の間はどこにあるんだ！」
青年がフィルデラの襟首をつかみ、揺さぶりながら問い詰める。
「それはできません！」
ぱしんっ……。
言い返したフィルデラを、青年の平手がおそった。
だが、フィルデラはひるまずにさらに言葉を継ぐ。
「今から封邪の間にいけば、神に知られないわけにはいきません……。これを見てください」
フィルデラは必死の表情でそう言うと、背負い袋をおろし、そのなかにあるもの……闇色の卵……を、青年に示した。
「こ……これは……」
「そうです……この子を護るために、エメラークさんは、すべてをかけたんです……。私はこの子を彼女に託されました。私には、この子を安全に逃がす義務があります。たとえあなたにでも、この子を危険にさらすまねはさせません！」
「そう……か。そうだったのか……。エメラークも……」
その闇色の卵は、青年の怒気をうすれさせ、冷静な表情をとり戻

させた。
だが、その感情を抑えた表情のなかには、薄っぺらい表面的な怒りではなく、蒼く冷たい光を発しながら、その実、赤い炎の何倍もの熱を持つ紫炎のような、真実の怒りが存在するのをフィルデラは感じていた。
どんな経験が、人にこれだけの怒りをもたらすのだろう？
このひとに、これだけの怒りを抱かせるほどの仕打ちをしたのは、自分がこれまで信じてきた神なのだ。
私、本当になにも知らなかったんだわ……。
そんな神に盲従してきたこれまでの自分を、フィルデラは心から恥じていた。
「危険をおかしてこいつを護ってくれたのに、殴ったりしてすまなかったな。女に暴力をふるうなんて最低だ……。エメラークに怒られちまう。とにかく、卵は預かろう。きみは巫女なんだろう？　見つからないうちに、自分の部屋へ戻るといい」
自嘲してつぶやく青年に、フィルデラはかぶりを振る。
「いいえ……あなたの怒りは当然です。私は……私達はそれほど、ひどいことをしてきたんですから。知らなかった、気付かなかったで済まされることではないんです……。神は間違っています！　ですから、私は戻りません。この卵を托された以上、さっきも言ったように、私はこの子にたいして義務があるんです。私もあなたと同行します」
そう言ってフィルデラは、青年を真剣な表情で見つめた。
「本気……なのか？　俺はおまえの信じる神に、敵対する組織に属しているんだぞ？」
念を押す青年に、フィルデラは迷うことなくうなずく。
「はい。あなたは、私が以前信じていた神の敵です」
フィルデラはそう言って、にっこりと微笑む。
しかし、ルアークは、その笑顔の中に固い決意が秘められているのを知った。

「わかった……俺の名前はルアークという。よろしくな」
「私は、フィルデラと申します……よろしくお願いします……」
運命が……動き始めた。

※

わからない、娘だな……。
自分よりも真剣に宝物をあさるフィルデラを見て、ルアークは頭を抱えた。
「ルアークさん見てください……。この大きな紅玉を。これなら、高く売れますよね……。ひい、ふう、みい……七つありますから、ひとつくらい持って行っても、ばれません。どうぞ……」
「あっ、ああ……」
うずらの卵ほどの大きさの紅玉を受け取って、ルアークは力なく返事を返す。
あのあとすぐに脱出しようとしたルアークを、『ついでですから』と宝物庫に誘ったのはフィルデラの方なのだ。
しかも、『足がつくような品は困りますよね』などとおっしゃって、手際よく、持ち出す宝物の選別を始めたりなんかしたのだ。
こいつこそ、本物の盗賊なんじゃないだろうな？
ルアークは、小さな巾着袋を取り出すと、フィルデラが選別した宝石を、その中に入れた。
「あれ……ルアークさん、もしかしてその袋は？」
「そう、『狭間の袋』さ」
『狭間』と呼ばれる世界の隙間とつながるこの袋は、みかけの何倍もの容量をもっている。ルアークが取り出したその狭間の袋は、人ひとりくらいならなんとか収納できるくらいの容量を持っていた。
「もう……そんな便利な物があるなら早くおっしゃってくだればいいのに……。それがあるなら、持ち運びの利便のために、かさの少ない宝石だけを選ぶ必要はありませんから……。貸してください」

そう言って袋をひったくると、今度は食器棚の方にむかう。
銀や金、そして玻璃でできた高価そうな食器が、呆れるほどたくさん並んでいる。
フィルデラは、一種類の食器について数枚づつ、狭間の袋の中にしまいこんでいった。
「これぐらいでよろしいでしょうか？　ルアークさん……」
よろしいでしょうかも何も、一生、いや、十生は遊んで暮らせそうなほどの宝物が、すでに袋の中にはしまいこまれている。
「いいんじゃないかい……。しかし、おまえ、宝物庫の管理係をしてたって言ってたが、本当は宝物の横流しでもしてたんじゃないだろうな？」
ルアークがそう言うと、フィルデラは首を振った。
「いいえ……業務の一環として、宝物の売却を行っていたんです。私も、最初は知らなかったんですけど、ある時、宝物の一部が減っていることに気がついて、テレシアさん――えっと、管理長をなさっている女神官です――にたずねたら、極秘のうちに必要な資金をそろえるために、裏のルートで売却する必要があったんだって教えられて……。それから私も、テレシアさんのお仕事を手伝うようになったんです」
あの～、それを横流しって言うんじゃないのでしょうか？
どう考えても、テレシアという人物に騙されていたとしか思えない。
しかし、あくまで真剣らしいフィルデラに、そのことを指摘するのは可哀想で、ルアークは頭を抱えながらも黙っていた。
本当に、おかしな娘だ……。
巫女らしく、純真な性格をしているのだが、その割には視野の狭さが無い。
世間知らずかと思えば、裏のルートでの取り引きなんていう、とんでもない知識を身につけていたりするし……。
なによりも、選ばれた者だという特権意識がないのだ。

これまでに出会った、貴族や神殿の特権階級達は、必ずその特権意識が腐臭を漂わせていた。
巫女などの中には、下層階級に優しく接する者もあったが。それはあくまで、その特権意識に根差した、偽善的なお情けでしかなかった。
そして、ほとんどの者は、その偽善的なお情けでさえ、持ち合わせていないのだ。
それに比べて、この少女はどうだろう？
特権意識に凝り固まることなく、物事を客観的に判断する、たぐいまれな能力を持っているのではないだろうか？
間違っていると思えば、今まで信じていた神をも批判し、横流し以外の何物でもない行為を、業務だと説明されてあっさり納得し、盗賊だと思った相手に、自分の身柄をまかせようとし……いや……やっぱりただのアホかも知れない……。
「ルアークさん、どうされました？　なんだか、おかげんがよろしくないようですけど……」
心底、心配そうな表情で自分を見るフィルデラに、ルアークの疲労は倍化した。
「いや……なんでもない……。とにかく、ここを脱出しよう……」
「はい」
出会ったばかりの自分を、信じきった瞳で見つめながら返答するフィルデラに、ルアークは深々とため息をついた。幕間
「なるほど、そういうことだったのね。“あいつ”が関ってたんだ……」
神殿の一角、宝物庫からそう遠くない部屋で、彼女は幻像を見ていた。
幻像の出演者はふたり。フィルデラと、ルアークだ。
「ルアークくんは、私やこの娘みたいな、“かけら”じゃないんだわ……。こんな手段があったんだ。“かけら”を送り込む以外に、

こんな手段が……」
独り言を言うのがくせなのだろうか？　幻像を眺めながらぶつぶつ言う彼女は、ちょっと危なくみえる……。
「やっぱり“あいつ”、かなり頭がきれるわね……。ルアークくんは私達と違って、この世界で産まれ、この世界に属する存在だから、彼が存在しているだけで、この世界のバランスに役立っているんだわ」
今回の件に、妹――いや弟というべきか？　――のレアディが関わっていたことは知っていた。
これまでに彼女が感知した、他の界からの干渉。彼女自身が行ったものを除けば、それはすべて、レアディの波長を伴っていたからだ。
その裏で“あいつ”が糸を引いているとは、思いもよらなかった。
そのとき、結界を越えたふたりの姿が、幻像から消えた。
「さぁてと……まずは宝物の帳簿を、書き換えてあげなくちゃね……。もうあの娘ったら、私が目をつけてた宝石、全部持ってっちゃって……」
テレシアと呼ばれるその女性は、そう言ってにっこりと微笑んだ。

～幕間～

「なるほど、そういうことだったのね。“あいつ”が関ってたんだ……」

神殿の一角、宝物庫からそう遠くない部屋で、彼女は幻像を見ていた。

幻像の出演者はふたり。フィルデラと、ルアークだ。

「ルアークくんは、私やこの娘みたいな、“かけら”じゃないんだわ……。こんな手段があったんだ。“かけら”を送り込む以外に、こんな手段が……」

独り言を言うのがくせなのだろうか？　幻像を眺めながらぶつぶつ言う彼女は、ちょっと危なくみえる……。

「やっぱり“あいつ”、かなり頭がきれるわね……。ルアークくんは私達と違って、この世界で産まれ、この世界に属する存在だから、彼が存在しているだけで、この世界のバランスに役立っているんだわ」

今回の件に、妹――いや弟というべきか？　――のレアディが関わっていたことは知っていた。

これまでに彼女が感知した、他の界からの干渉。彼女自身が行ったものを除けば、それはすべて、レアディの波長を伴っていたからだ。

その裏で“あいつ”が糸を引いているとは、思いもよらなかった。

そのとき、結界を越えたふたりの姿が、幻像から消えた。

「さぁてと……まずは宝物の帳簿を、書き換えてあげなくちゃね……。もうあの娘ったら、私が目をつけてた宝石、全部持ってっちゃって……」

テレシアと呼ばれるその女性は、そう言ってにっこりと微笑んだ。

二章

「早く……出たいなぁ……」
暗くて、寒くて……。広いんだか狭いんだか良くわからない、その妖しげな空間の中で、フィルデラは心細げにつぶやいた。
ここに入ってから、もう何時間もたったような気がする一方、ほんの数分間しかたってないような気もする。
時間の感覚がおかしくなってる。
もしかしたら、この空間では外とは時のたち方が違うのだろうか？
外での数分が、ここでは何十年にもなったりして……。
冗談でそう思ったのだが、その考えはフィルデラの心をさらにおびえさせた。
結界を安全に越えるために、狭間の袋に入ってもらえないか？
そうルアークに言われて、入ってみたのはいいが……。
「いやだ、もう……早く出たい！」
そう叫んだ瞬間、突然、胸と背中に手が押しあてられた。
「きゃう！」
ぐい……。
その手は無造作にフィルデラの身体をつかみ、“外”へと釣り上げる。
“外”に出たフィルデラは、突然、地面の角度が変わったせいで倒れそうになり、広い胸に抱きとめられた。
少年――この時のルアークの表情は子供っぽくて、少年と呼ぶにふさわしいものだった――は、フィルデラをしっかりと抱きとめながらも、偶然の起こした事態に思わず照れてうつむいた。
しかし、まだ両手は、フィルデラの身体――その胸と背中にしっかり添えられている。
ルアークに触れられている部分が、炎にあぶられるように熱い。
「ルアークさん……。手を、手を離してください……」

フィルデラの言葉に、半ば放心状態におちいっていたルアークは、やっと自分を取り戻し、あわててフィルデラの身体を離した。
「ご……ごめん」
「いいえ……」
フィルデラの胸は早鐘をうち、全身が火が出るように熱い。
それは、これまでウワサにしか聞いたことのなかった、恋の症状に酷似していて……。
まだ、出会ったばかりなのに……。
そう考えれば、今度は“一目惚れ”、という単語が頭に浮かんで来る。
ルアークはルアークで、何を思っているのか、真っ赤になってうつむいたきり、ひと言も話さないし……。
ふたりを気まずい沈黙がおそった。
テレシアが見ていれば、『もう……ふたりとも、可愛いんだから♪』っと思いっきり喜びそうな雰囲気である。
だが、当事者たる初心なふたりにとっては、冗談ではない。
互いに“異性”を意識してしまって、彼らとしては、照れてうつむくしか対処の方法がなかった。
とにかく！　今はこんな恋愛ごっこをしているヒマはないのだ。
何とか心を落ち着かせて、話し掛けようとするが……。
「あの……」
「えーと……」
言葉をかけようとするタイミングさえばっちり合ってしまって、また、ふたりとも照れてうつむいてしまった。
そうやって『ふたりの世界』にひたっていた彼らを、現実に引き戻したのは獣の気配だった。
ルアークの顔がぱっと引き締まり、冷静な、大人びた表情に変化する。
そして、すばやい動きでフィルデラを後ろにかばうと、殺気を発する獣に対した。

「光獣だな。行きには見掛けなかったから油断していたが、やはりこいつらには禁忌は関係なかったか……」
光獣とは、種を問わず、光の要素を多く持った獣のことを指す。
そして、巫女である自分達と同じく、神に選ばれた聖なる存在であると、フィルデラは教えられてきた。
しかし、フィルデラにも解るその気配は、歪み、狂気さえはらんだ禍々しいものであった。
ひい、ふう、みい。
三つの気配がふたりを伺っている。
それらは、うなり声も、吠え声もたてない。
この獣達には、侵入者を始末するために特殊な訓練がなされているのだ。
フィルデラをかばうルアークには、隙が無い。
獣達も、攻めあぐねているのか、まだおそってはこない。
緊張が臨界点に達した瞬間。ルアークがふっと気をぬいた。
引き絞られた矢が放たれるように、光獣がルアークに向かう。
「ルアークさん！」
その“三本の光の矢”に、ルアークが貫かれたような錯覚を感じて、フィルデラは思わず声をあげた。
だが、倒れたのはルアークではなく、三頭の光獣達だった。
勝負は一瞬。
一頭は短剣で眉間を突かれ、もう一頭は同じく短剣でのどをかき切られ、そして、ルアークに達するかに見えた最後の一頭は、彼が造り出した魔法の障壁に跳ね返されて、地面に転がっている。
にやり……。
さっきフィルデラの前で、照れてうつむいていたのと同一人物とは思えない、凄惨な笑みを浮かべ、ルアークはまだ息のある最後の一頭に歩み寄る。
くぅ～ん。
その光獣……どうやら犬だったようだ……は、もうすでに戦意を

失い、哀れな鳴き声をたてている。
「やめて！」
殺しては……だめ！
しかし、その獣をかばおうと飛び出したフィルデラは、ルアークに力一杯突き飛ばされた。
「きゃうっ」
したたかに腰を打ち付け、フィルデラは思わず悲鳴をあげる。
「ルアークさん……あなたは！」
突然、理解できない行動をとった相手を非難しようとしたフィルデラは、実は間違っていたのは自分であったことに気がついた。
光獣は戦意を失ってなどいなかったのだ。
ルアークに突き飛ばされなければ、フィルデラは光獣に引き裂かれ、命を失っていただろう。
「芝居をうつとは、獣の分際で味なまねをしてくれる……」
そうひとりごち、ルアークは、倒れたフィルデラをかばうように、光獣と対峙した。
重苦しい沈黙。
やがてそれにじれた光獣が、ルアークに飛び掛かった。
だが、対するルアークには先程のような、技の切れが無い。
くり出した短剣は、やすやすと獣にかわされてしまい、辛うじて間に合った魔法の障壁で、獣の攻撃を防ぐ。
「くっ……」
その様子を見て取って、獣はここぞとばかりに、ルアークに連続攻撃をしかける。
反撃もできずに防御に徹したルアークが、少しづつ追い詰められていく。
ルアークさん！　どうしたの？
「あっ……」
フィルデラは気付いた。ルアークは傷を負っているのだ。
肩口からななめにえぐられた、深い傷。

その傷のために、ルアークは本来の力を発することができないのだ。
あの時……自分をかばって突き飛ばした時。
彼は自分の代わりに傷を負ったのだ。
フィルデラは自らの愚かさを悔いた。
そして、ルアークを傷つけ、追い詰めている獣に対して、これまで感じたことのない、怒りに似た、昏い感情を抱いた。
これは……なに？
それは、憎しみ。
そう呼ばれる感情であることを、フィルデラは知らなかった。
「うっ……」
獣の鋭い攻撃を腕に受け、ルアークが短剣を取り落とした。
武器を失ったルアークに止めを刺さんと、獣が跳躍する。
「だめえぇっ！」
その極限の状況に、フィルデラの中で感情が暴走し、『力』となってほとばしった。

※

ここで、死ぬのか？
間近に獣の姿をした死が、迫っている。
『力』さえまともに使えれば……。
結界は抜けたといっても、ここはまだ光神殿の敷地内である。
闇の恩寵深いルアークの『力』は、ほとんど封じられてしまっている。
だが、ただ死ぬわけにはいかない。
自分が死ねば、次はあの少女が、この獣に引き裂かれるだろう。
せめて……相討ちに……。
使えるかぎりの『力』を集めて、闇の刃を造りあげる。
ふふっ……。

今、意識のほとんどを占めるのは、エメラークでも、母でもなく、出会ったばかりのあの少女だった。
惹かれて……いる？
自分とは対称的な存在。
光の恩寵深い、美しい少女に。
自分は、惹かれているのだ。
もっと知りたかった。
彼女のことを……。
だが、その願いがかなえられることはない。
もう終わりなのだ……。
全てをあきらめた瞬間。
まばゆい白光が、獣を襲った。
圧倒的な光の力。
しかし、自らとは相反するはずのその力に、ルアークは不思議な暖かさを感じた。

※

「ルアークさん！」
ほとばしった『力』が『光』と化し、いままさに、ルアークを引き裂かんとしていた光獣に注がれた。
その光は、破壊のためのもの。
光獣が溶けていく。
どろどろと歪みながら、光獣が溶けていった。
どさり……。
醜く歪んだ光獣の死体が、地に横たわる。
「私……わたし……？」
自分が殺したのだ。
「あっ……ああ……」
自分自身が怖かった。

あの時、確かにフィルデラは光獣の死を願った。
昏い、これまで感じたことの無いような感情に突き動かされて、『力』を破壊の光に変え、光獣を殺したのだ。
フィルデラは呆然と、その場にへたりこんだ。
「フィルデラ……危ない所を済まなかった……。おかげで助かったよ」
ルアークに声をかけられても、フィルデラは返事を返すことができなかった。
普通ではないフィルデラの様子に、ルアークは驚いて駆け寄る。
「フィルデラ！！　しっかりしろ」
ぱしっ……。
軽くほほを叩くと、やっと瞳の焦点があう。
「ルアークさん。私は……わたしは……」
その瞳に浮かぶのは罪の意識。
彼女は、自分自身におびえているのだ。
「フィルデラ……何におびえている？」
ルアークは、わざと、突き放すようにそう言った。
「私は……なぜ、あんなことを……。私は……」
うわごとのようにつぶやくフィルデラを、ルアークは皮肉げに嘲ける。
「なるほど……俺を助けたことを後悔してるってわけだ……」
「違います！　どうして、そんな！」
「そうじゃないか。おまえが“あんなこと”をしなければ俺はあの獣に殺されていたんだぞ。光獣を殺すか、俺を見殺しにするか、あの場面では二者択一だ。そして今、おまえは光獣を殺したことを後悔している。ということは、俺を助けたことを後悔していると、そう言うことになるんじゃないか？」
「それは……」
詭弁だ。そう言い返そうとしてフィルデラはできなかった。
ルアークの言葉は、ある意味においては正しかったからだ。

だが、やはりそれは詭弁だ。
生き物を殺すのは絶対に許されないことだ。
たとえそれ以外に方法がなかったとしても、そのことを正当化してはならない。
それは、絶対に正しいことだ。
フィルデラは、その、絶対に正しいはずの自分の感情を、曲解されたことに怒りさえ覚えて、ルアークに反論しようとする。
この時、フィルデラに少しでも冷静さがあれば、ルアークのその冷たい言葉の裏に、フィルデラの心が危険な自己嫌悪の罠にはまるのを防ごうという意図があったことに気付いただろう。
だが、そのようなルアークの配慮を必要とするほどの今の彼女の心に、そんな余裕があるはずもなく、怒りに流され言葉を紡いだ。
「それは違います！　たとえそれしか方法がなかったとしても、命を奪うのは絶対に許されないことです。あなたのように、そのことを当然だなんて思うのは間違っています！　光獣を屠ろうとした時、あなたがどんな表情をしていたかご存知ですか？　まるで命を奪うことを楽しんでいるかのような、そんな表情でした……あなたは……」
それ以上、フィルデラは言葉を続けることができなかった。
冷たい……つめたい……感情をなくしたルアークの発する冷気に、さえぎられたのだ。
「そう……か。俺は、そんな表情をしていたか……。おまえは、そう感じたのか」
おまえも……おなじか……。
自嘲の笑みを浮かべたルアークの、その苦々しいつぶやきに、感情に流されていたフィルデラは、急速に冷静さを取り戻しつつあった。
怒りから立ち返ったフィルデラに、乾いた笑いを浮かべて、ルアークが質問する。
「フィルデラ。おまえは食事をしたことがあるか？」

唐突なルアークの質問に、フィルデラは戸惑いの表情を浮かべて、口を開いた。
「それは……食事をしなければ、生きていけませんから」
フィルデラの返答に、ルアークは馬鹿にしたような表情を作って、言葉を継ぐ。
「それは大変だな。おまえは毎日食事をするたびに、殺された動植物のために、今のように後悔しているのだろうからな。なにしろ、自ら手を下してさえ、これだけ自分を責めているんだ。自らは手を汚さず、罪を他人に委ねている食事のときの悔恨は、想像を絶するものなんだろうな」
「あ……」
単純な、本当に単純な事実。
自分が今、ここにこうして生きているということが、他者の犠牲のうえにあるという事実。
そのことに、フィルデラはまったく気付いていなかった。
ルアークを助けるために、あの光獣の命を奪ったこと。
そして、自らが生き続けるための糧として、動植物の命を奪うこと。
この両者にどんな違いがあるというのだろうか？
いや、ルアークの言うとおり、自ら手を下していないぶん、食事をとるときの罪のほうが重いくらいだ。
自分も、あの、神とおなじだ……
絶対的に正しいことなどありえない。ただひとつ、それ自身をのぞいて。
それなのに自分は、自分の中だけでしか通用しない『正しさ』を振りかざし、ルアークを傷つけたのだ。
「ルアークさん……」
呼び掛ける……が、何の反応もない。
フィルデラを完全に無視して、ルアークは倒した光獣の方に向かおうとする。

「うっ……」
肩の傷がいたむのか、一瞬顔をしかめたルアークに、フィルデラは思わず縋りつく。
「ルアークさん！」
拒絶される……と思った、せめてそうして欲しかった。
だがルアークは、何の感情も表情に宿さず、フィルデラに顔を向けさえしなかった。
フィルデラは、くじけそうになる心を叱咤して魔法を発動し、彼の傷を癒す。
しかしルアークは、何事もなかったかのようにフィルデラを無視し、静かに立ち上がった。
そして、取り落とした短剣を拾い、傍らに転がっている、フィルデラの発した光線に灼かれて醜く歪んだ光獣の死体を、短剣で突いた。
いったい何を！
後を追いかけてフィルデラは、その行為の理由を知った。
その獣は、まだ死に切れずに苦しんでいたのだ。
……ありがとう……。
ルアークに感謝を捧げ、魂が去っていく。
その魂に奇妙な歪みを感じて、フィルデラは思わず問いかけていた。
「この歪みは……なに？」
去りかけていた魂が、フィルデラに思念を返す。
大きな、おおきな光に満ちた存在。
光獣の、その存在に対する凄まじい怒りの波動が、フィルデラをおそう。
それが……それが、あなたを歪めたの？
肯定……予想どおりの肯定。
そして光獣は、フィルデラにも感謝の念を返した。
それを言葉に直せば以下のように訳することができる。

あなたの光は暖かかった……開放してくれてありがとう……と。
自らを傷つけたフィルデラに対して、感謝の念を返したのだ。
消えゆく魂を見送るフィルデラの中に、神に対する新たな怒りがわきあがる。
こんな……こんなことって！
破壊の光を暖かく感じるほどの苦しみ。
それはいったい、どのようなものなのだろう？
怒りは臨界点を越え、昏い何かを伴って、ある感情へと進化した。
これは……この感情は……。
それは、さっき光獣に対して抱いた、負の感情と同じものだった。
それは、憎しみ。
いまフィルデラは、初めてその感情の意味を理解した。
神が憎かった。
このようなむごい行いを見せ付けられて、そう思わずにはいられなかった。
フィルデラは気付いた。
あの時、ルアークの凄惨な表情の裏に、存在していた感情に。
ルアークさんも……憎んだんだわ。
いえ……ずっと、憎み続けて来たんだわ……。
これは負の感情。
昏い感情。
だが、これは人としてあるために、必要なものだ。
否定することはできない。
そのことにいま、フィルデラは気付いた。
「ルアークさん……」
呼び掛ける……が、荷物をまとめるルアークに反応はない。
しかし、フィルデラは構わず、言葉を続けた。
「ルアークさん、すいませんでした。私……浅薄でした。あなたに、軽蔑されても仕方ないと思います。ですけど……あなたと同様に、私も神を許すことができません。そして、そんな神に仕えていた、

自分自身を許すことができないんです。ルアークさん、お願いです。私にその罪をつぐなう機会を与えてください。そして、今、重ねたばかりの、あなたに対する罪に対しても……。お願いします」
反応は期待していなかった。
だが、ルアークは振り向いた。
相変わらず無表情だが、とにかく振り向いてはくれたのだ。
「こいつを托されたのはおまえだろう？　それなら、最後まで責任はもて」
ぶっきらぼうにそう言って、竜の卵の入った背負い袋を、ルアークはフィルデラに返した。
それっきり、何も言わず無言で歩き去っていく。
フィルデラは静かに、その後を追いかけて行った。

※

既に峠を越え、東の海が見える所まで進んでいる。
水平線が、白み始めていた。
まもなく、朝が訪れる。
ルアークは、ちらりと、横目で後ろを振り返った。
一晩中歩き続けているのだ。
疲れているだろうに……彼女は何の不平も言わない。
どうして、おまえは……。
いや……どうして……俺は……。
裏切られた……と思った。
だが、裏切ったのは、自分の方だったのだ。
彼女は確かにルアークを傷つけた。
彼女に惹かれはじめていたルアークは、彼女を理想化し、無邪気に、彼女が自分の全てを受け止めてくれるものと信じていた。
その、勝手な理想を崩されて、ルアークは傷ついた。
命を奪うことを楽しんでいるような表情をしていた……と。

彼女はそう言った。
あの時、ルアークのほとんどを占めていたのは、神への怒りだった。
しかし、自分の中に、少し、ほんの少しだが、殺戮を楽しむ感情があったことに、ルアークは気付かされた。
そして、そのことをごまかすために、自分はさも正しいかのように、彼女のちょっとした間違いを責めたてたのだ。
過剰防衛……だ。
自分の言葉がどれだけの打撃を彼女に与えたか。
ルアークは気付いていた。彼女の心があげた悲鳴に。
だが、あの時の自分は、彼女の心が傷つくことに、喜びを感じてさえいたのだ。
それなのに彼女は、そんなルアークの苦し紛れの皮肉を真剣に受け止め、ひたすら自分だけを責め続けている。
俺は卑怯だ……。
そうやって、彼女が苦しんでいるのに気付いていても、自分の過ちに気付いていても、ルアークは何も知らないふりをした。
彼女の苦しみに気付きながら、ルアークは何もしなかったのだ。
そのとき、どさり……と、後ろで音がした。
振り向くと。
体力の限界に達したフィルデラが、地に横たわっていた。
卑怯なだけではない……。
本当に自分は情けない……なんと情けない男なのだろう……。
彼女が、疲れているのを知りながら、気付きながら。
歩みを緩めることもなく、フィルデラにとっては、明らかなオーバーペースで歩き続けたのだ。
「ごめんなさい……ルアークさん、ごめんなさい」
朦朧とした意識の中でひたすら謝る少女に、ルアークは水筒を差し出した。
「飲め……」

のどに水を流し込み、一息ついて、フィルデラは悲しげにうつむいた。
「すいません……。ルアークさんにご迷惑をおかけして……。足手まといになってしまって……」
「そう自覚があるのなら、せめて倒れる前に言って欲しかったな。無理をしても、結局こういうことになって、余計に足を引っ張ることになる」
おまえは何も悪くない……。悪いのは俺だ……。
そう思う心とは裏腹に、口をついて出たのは冷たい言葉だった。
紡がれた言葉は刃となって、彼女の心に突き刺さる。
「ごめんなさい……。本当に……ごめんなさい」
なにを、謝る必要があるというのだろうか？
悪いのは自分だ。
彼女にとって峠越えがきついことは、最初から解りきっていたのだ。
だから、荷物の分担とペース配分に気を付けてやれば、何の問題もなかったはずだ。
それを解っていて、ルアークはわざと彼女を無視したのだ。
本当に……どうしようもないな……俺は。
自嘲してルアークは言葉を紡いだ。
「まあ、済んでしまったことは仕方ない……。次から気をつければいい。どうせ、そろそろ休憩を取らねばならなかったんだ。食事にしよう……。立てるか？」
なにを、かっこつけているんだ？
いかにも傷ついた彼女を許してやるという風を装って、ルアークはフィルデラに手を差し出した。
そんな自分を、ルアークはさらに嫌悪した。
自分に向けられた彼女の笑みが、心に突き刺さった。
※

完全に嫌われてしまった……と思っていた。
目の前に差し出された腕が信じられない。
彼は、優しい表情で自分を見ている。
フィルデラは、ゆっくりとその腕を取った。
力強い腕に引かれて立ち上がってみると、まだ足がぐらつく。
だがルアークが、しっかりと支えてくれた。
「ルアークさん……」
それだけで、たったそれだけで、傷ついた心が癒されていくのを、フィルデラは感じていた。
岩場の陰、平らになった大きな岩の上に、ふたりは腰をおろした。
ルアークは自分の背負い袋をおろすと、塩漬け干肉と、乾麦、そして干果を取り出した。
「火は使えないから、このままで我慢して欲しい。食欲がないかもしれないが、食べなければさらに体力を失うことになる。口にあうとは思えないが我慢して食べるんだ」
フィルデラはうなずいて、沢水で洗って塩を抜いた干肉を受け取り、口に入れた。
塩辛い……が、疲れたフィルデラにはその辛さが心地好かった。
だが、固い肉をよく噛んで、飲み込もうとしたとき……。
「うっ……」
胸がねじれるような吐き気が、フィルデラを襲った。

※

「はあ……はあ……うぇっ……」
げぼ……
吐くものなどないというのに……。
自らを責めるように、フィルデラは苦い液体を絞り出し続けた。
「フィルデラ……」

これは肉体的なものではない、精神的なものだ。
フィルデラの“こころ”がふるえている。
ルアークは、昨夜自分がフィルデラに放った言葉を思い出していた。
あの言葉はフィルデラに、生きるためには必ず罪が伴うことを、気付かせてしまったのだ。
そして、繊細なフィルデラの心は、他者を犠牲にしてまで、生き続けることを望まなかったのだろう。
俺の……せいだ……。
俺が、あんなことさえ言わなければ。
彼女は、自らの罪に気付くことなく……。
いや……それではだめだ
彼女は気付かねばならなかった。
『生きていくこと』がはらむ罪に、気付かなければならなかったのだ。
ルアークは思い出した。
エメラークに拾われて、はじめて狩りをした時のことを。
はじめて、他者の命を奪った時のことを。
あの時自分は、自ら手を下し命を絶ったウサギの肉を口にして、今のフィルデラのように嘔吐した。
あの時のエメラークの怒りは忘れることができない。
逃げるな……と、彼女は言った。
罪から逃げるな……と。
それに立ち向かえ……と。
フィルデラも乗り越えなければならないのだ。
生とともにある罪を、乗り越えなければならないのだ。
「落ち着いたか？」
ルアークは、できるだけ冷たい口調を装って、フィルデラに話しかけた。
その冷たさを感じ取り、フィルデラはまつげを伏せる。

「ルアークさん……私、わたし……」
ルアークは、口ごもったフィルデラをさらに突き放し、皮肉の刃をあびせる。
「いい気なものだな。逃げればそれで許されるとでも思っているのか？　考えてみろ。すべての生命は、生きるために罪を負う。だがそれでも、生きてゆかねばならないんだ。自分の罪から目をそらすな！　おまえは気付いていないのか？　逃げることこそ、最大の罪だということに。おまえは卑怯者だ。生をうけこの世に存在する以上、おまえには生き抜く義務がある。ここでそれを放棄するなら、これまでおまえが生きるために命を絶たれたものたちに、どう言い訳するつもりだ？　もう一度言う。おまえは卑怯者だ！　おまえの罪の償いとは、逃げることなのか？」
そう言ってルアークは、うつむいたフィルデラに水筒を差し出し、口をすすがせる。
そしてもう一度、干肉を切り分けると、フィルデラに押し付けた。
「食べるんだ」
フィルデラは、決然とした表情でルアークを見返し、干肉を口に押し込んだ。
固い肉をゆっくりと咀嚼し、心を決めて飲み込む。
「うっ……」
ごくん……。
吐き気をこらえながらも、フィルデラは肉を飲み込むことに成功した。
これで……いい。フィルデラは新たな一歩を踏み出すことができたのだ。
結果的に、あくまで結果的にではあるが、ルアークのとった態度は正しかった。
自己の存在基盤を失った彼女には、中途半端な優しさではなく、厳しく接することが必要だったのだ。
彼女自身が、新たな土台を、自らの心に造りあげる必要があった

のだ。
「もう、大丈夫だな？」
そうたずねると、フィルデラはこくんと小さくうなずく。
「はい……私、自分がどれだけの罪を背負っているか、そのことに全く気付いてなかったんですね。もう逃げたりはしません。自らの罪に、そして、神の罪に、立ち向かって行きたいと思います」
そう言ってフィルデラは、澄んだ瞳に絶対的な信頼を浮かべて、ルアークを見つめた。
誤解だ……。
フィルデラは、ルアークが彼女のために厳しい態度を取ったのだと誤解しているのだ。
そうではない、違うのだ。
結果的に彼女のためになったとはいえ、ルアークは彼女を思いやって、そんな態度をとったのではない。
彼女の心の清澄さに、自分の心の汚さを認識させられて、それをごまかすために、あのような態度をとったのだ。
決して自分は、彼女にこのような視線を受けるにふさわしい人間では、あり得ないのだ。
しかし……。
そう、解っていながらも、ルアークはフィルデラを、そして自らを偽らずにはいられなかった。
怖かった。
彼女に自分のちっぽけな本性を悟られるのが、本当に怖かったのだ。
だから、ルアークは演技した。
いかにも、すべて解っていたというような笑みを浮かべて、彼女に微笑みかける自分が、心底から情けなかった。

～幕間～

「やっほー。ラディアス君、元気してた？」
相手の迷惑そうな表情に全く気付きもせずに、テレシアは、いや、光主女神リ・セルテ・リ・エシアは、脳天気に呼び掛けた。
イフェ・ラディアスはため息を付くと、あきらめて返答する。
「リ・セルテレシア。何か御用ですか？」
ふたつ目の敬冠詞『リ』の後に母音が来ているので、『リ・セルテ・リ・エシア』は『リ・セルテレシア』と発音される。
リ・セルテレシアは、その、迷惑だ、というニュアンスを言外に含ませた言葉に、にっこりと笑いながら答える。
「いいえ、そちらのほうこそ、私に何か用があるんじゃないのかなぁって思ったから、わざわざ出向いてあげたんだけど、違ったかしらん？」
違う違う！　大違いだ。そう言いかけた時、リ・セルテレシアが小声で付け加えた内容に、イフェ・ラディアスは仰天した。
ルアークくんのことなんだけどなぁ……。まあ、私はいいんだけどね。あのアホにこのことがばれたって。
そうおっしゃって、にっこりと微笑む相手に、イフェ・ラディアスは頭を抱えた。
「あなたのおっしゃる通りです。私のほうから伺うのが礼儀なのに、わざわざ来ていただいてすみません。どうぞおあがり下さい」
「それじゃぁ、お邪魔するわ」
そう言いながら、もうすでに、ずかずかと応接室に向かっている彼女の後ろ姿を見おくるイフェ・ラディアスの拳が、ぷるぷると小刻みに震えていた。

※

「うんうん。やっぱり、ラディアス君のいれたお茶は美味しいわ……」
ズズズズ……。
「お代わりお願い」
四杯目である。
イフェ・ラディアスは差し出された湯飲みにお茶をつぐと、乱暴にリ・セルテレシアの前に置いた。
どんっ。
「ありがと……」
ズズズズ……。
「ぷはぁ……本当に美味しいわ、このお茶。同じ茶葉のはずなのにどうして私のいれたのと、こうまで違うのかしら……」
その言葉に、彼女がいれた破壊的なお茶の味を思い出し、吐き気が込み上げる。
どうやったら、あんなに不味くお茶をいれられるのか、こちらが聞きたいくらいである。
思わずげんなりしてしまう心を叱咤して、少しでも状況を改善すべく、イフェ・ラディアスは言葉を紡いだ。
「リ・セルテレシア、ひとつお聞きしたい。あなたの立場からして、たとえ傍観者としてでも、この件に関るのは得策ではないと思うのだが、どうでしょうか？」
正論である。
だがその正論も、彼女には何の感銘も与えなかったようだ。
「そんなことぐらい解ってるわよ。だけど、こんなおもしろそうなこと見逃すなんて、私、嫌よ。あなたが見せてくれないなら、私、自分で勝手に動くけど、それでも良いの？」
良くない。
そうなったらお終いである。
ため息をつきながらイフェ・ラディアスは、無条件降伏を決意した。

「解りました。あなたのおっしゃる通りにします。その代わり、あの世界にある、あなたの『かけら』はできるだけ早く引きあげてください。あなたの力は大きすぎる。ただでさえバランスが崩れかけているあの世界にとって、あれは邪魔でしかないんですから」
「解ったわ……」
本当に解ってるんだか、どうだか……。すべての神を統べる地位にある彼女の顔を、イフェ・ラディアスは疲れ果てた表情で見つめた。

三章

「あれが“俗都デルシス”だ」
迂回するために通った険しい峠道が開け、遠くに都の街並みを一望することができた。
デルシス。
半島の先端に位置するこの街は、尖った岬を中心にして、東西ふたつに分かれている。
西に位置するのが、光に選ばれた聖なる者達、貴族や神官が住む“聖都デルシス”。
そして、その向かい側、半島の東には、様々な民が集い住む、世界の商業の中心“俗都デルシス”が広がっていた。
フィルデラが居た神殿は、“聖都デルシス”を一望できる高台の上にあった。
整然と整った、しかし、どこか冷たい雰囲気を持つ“聖都デルシス”の見慣れた街並みとは対象的に、この“俗都デルシス”は、雑然としながらも、何か得体の知れない熱気というか、生命力を放っているようだ。
「何だか、すごい街ですね……」
すごい街……言い得て妙である。
“俗都デルシス”という街は、とにかく“凄い街”なのである。

※

「うっ……」
“俗都デルシス”の凄さその一、“凄い臭い”にあてられて、フィルデラは今にもはきそうな表情で、街道そばの木陰にへたりこんでしまった。
まだ街まではある程度距離があるのだが、風に運ばれ、すでにも

うかなり臭う。
だがまだまだこれでも序の口だ。
ここで鼻が慣れるまで、少し待った方がいいだろう。
「少し、ここで休もう……あの街の臭いは、最初はかなりきついからな」
「すいません……また、足手まといになってしまって」
健気に頭を下げるフィルデラに、ルアークは片目をつむって見せる。
「これは仕方がないことだから気にしなくてもいいさ。俺も最初来た時は同じだったんだから。しかもその時は風上だったから、街にかなり近づくまで臭いがしなくて、突然凄まじい臭気に襲われた俺は、胃の中のものを全部吐き……おっと」
「うっ……」
しまった……吐き気をもよおしている人間には、嘔吐を連想させるような台詞は厳禁だ。
「水を……水を下さい……」
ルアークは水筒を手早く取り出すと、フィルデラに渡した。
ごくん。
水を胃に流し込み、なんとか吐き気を堪え、フィルデラは苦しそうに吐息を漏らす。
「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……」
ルアークは、そんなフィルデラを抱き寄せると、背中を優しくさすってやった。
「フィルデラ……ごめん……」
「いいえ……こちらこそ、ご迷惑おかけして……」
そう言って顔を上げたフィルデラは、吐息も触れ合わんばかりの位置にルアークを感じて、思わずほほを赤らめる。
その体勢はまるで、口付けをかわしあう恋人同士のようで……。
えっと……あの……どうすれば……。
あせりまくったフィルデラの脳裏に浮かんだのは『口付けする時

には瞳を閉じるのよ』という、テレシアの言葉だった。
そうだわ……瞳を閉じないと。
フィルデラに瞳を閉じられてしまったルアークは、彼女以上に慌てまくった。
え……あ……う……。
情けない、本当に情けない表情で、フィルデラを抱きよせたままルアークは硬直してしまう。
別に俺から誘ったわけじゃないぞ、彼女が誤解しただけのことで、俺から誘った訳じゃない。
自分自身に言い訳しながら、ルアークは心を決め、そっと唇を重ねようとする。
その時。
「おいルアーク、ルアークやないか？」
自分に対する呼び掛けに、ルアークははっと我にかえり、すばやくフィルデラの身体を離した。
「おっと……こりゃ、お邪魔さんやったかな？」
そう言ってにやにや笑う悪友の顔を見て、ルアークは自分の不運さを嘆いた。

※

「おまえにも、ようやく、春が来よったか……」
うんうん。
ひとりで納得してうなずく悪友、ディース・キャプタムに、ルアークはげんなりとしてため息をついた。
フィルデラは、突然現れたその男に、警戒心あらわな視線を向ける。
栗色の髪と瞳を持つ、この男の年の頃は二十代前半くらいだろうか？
色男……そういう形容がぴったりあてはまる。

容姿の端正さだけなら、ルアークの方が優っている。
しかし、身にまとう雰囲気がいかにも、それっぽい、のだ。
「いやあ、おまえは一向に女に興味示しよらへんから、ほんまは危ない趣味の人ちゃうんかいな思て、心配しとったんやで。そやけど安心やな。神殿に忍び込んだついでに、巫女さんかどわかして来るくらいなんやから、もう充分、軟派道の初段をやれるで。これからも精進せいや」
……何かが、何かが違うような気がする。
頭を抱えてため息をつくルアークと対象的に、フィルデラは怒りに声をあげた。
「違います！　ルアークさんは私をかどわかしたりなんかしていません。私は自分の意志でルアークさんについて来たんです。訂正してください。ルアークさんに失礼です！」
しかし、そのフィルデラの怒りも、その男の分厚い面の皮は突き通せなかったようだ。
ディースはにやりと唇の端をつりあげると、諭すようにフィルデラに言う。
「可哀想にな……こんな悪い男に騙されて。こいつは、ほんまにたちの悪い奴なんや。こましては捨て、こましては棄て、これまで泣かした女は数知れず。実は子供も数人いてるんやで、ほんまに悪い奴やろ？」
「そうですね、ディースさん。あなたは、本当にたちが悪いみたいですね」
きっぱりと言い切られてしまって、さすがのディースも絶句する。
「う～ん……。可愛い顔して、なかなか言いよるなあ……」
苦笑してディースは、くしゃくしゃとルアークの髪をなでまわした。
「ルアーク、なかなかしゃんとした、エェ娘捕まえたやないか」
何だかとてつもない誤解をはらんでいるような気がするが、ルアークは何も言い返せない。

とにかく、あの時ディースが声をかけなければ、フィルデラの唇を奪っていたのは確かなのだ。
あんな決定的瞬間を押さえられてしまっていては、どんな言い訳も通用しない。
そうだ……本当に自分はもう少しで、フィルデラの唇を奪ってしまう所だったのだ。
改めてそのことに気がついてルアークは、深々とため息をついた。
どんよりと沈みこんでしまったルアークは放置することにして、ディースはフィルデラに改めて自己紹介を始める。
「わいは、ディース・キャプタム。このどあほぅの親友で仲買をやってる」
臆面もなく親友だと言ってのけたディースに、ルアークがあからさまに厭そうな表情を見せる。
仲がいいのは確かだが、親友というよりも悪友と言った方がいいようだ。
「あの……えっと、私は、フィルデラ・リファンディエントと申します。光神殿で巫女をしてました」
「フィルデラちゃんか……エェ名前やな」
リファンディエント……！　五光公家か……。
小声でそうつぶやき、ディースは何か思案するような顔をする。
「あの……ディースさん、さっきどうして、私が巫女だったってことが解ったんですか？」
フィルデラの言葉に、ディースは笑って答える。
「解らんはずないやないか、わいはルアークの行き先知ってたし、もし知らなんだとしてもやな、フィルデラちゃん。あんたほど光の属性に溢れた人間は見たことあれへん。誰が見ても巫女さん以外には見えんわ……。んっ？　……ちょいまてや」
ディースは、地面に穴掘って埋まりそうな雰囲気のルアークを振り返ると、厳しい声で問い詰める。
「おいルアーク、おまえ、まさかとは思うけどやな。フィルデラち

ゃんを、このまま街に連れてくつもりやなかったんやろな？　少なくとも髪ぐらいは染めとかんと、えらい騒ぎになりよるんちゃうか？」

ディースの言葉に、ルアークははっとなって、やっと我に帰る。

「フィルデラちゃんは、ちゃんと自分の意志で考えて、おまえについてきよったみたいやけど、客観的に状況をみるとやな、わいがさっき言うたように、おまえがこの娘をかどわかしてきよった、と考えるんが普通なんとちゃうか？　名門、リファンディエント家の娘で巫女さんをかどわかしてきて、追っ手がかからんはずがあるか？

それに加えて、わてらの仲間の中にも、ちょっとでも神殿に関りあるもんは滅ぼしてまえって言う過激なアホも、ぎょうさんいてるんやで。そんな奴等がやな、おまえが巫女さんと駆け落ちしてきたって知りよったら、どないなると思う？」

「……」

多少……いやかなりの誤解があるような気はするが、基本的にディースの言い分はもっともである。

何でそんなことに気付かなかったのだろう、自分の馬鹿さ加減にルアークは唇を噛み絞める。

「まっ、そないに落ち込むなって。人間何事も、完璧ってわけにはいけへんのやから。神さんでも間違いだらけやのに、“力”はあってもただの人間に過ぎんおまえが、少々間違うたかてしゃあないわ。幸いまだなんも問題はおきへんかったんやろ？　後悔する暇があったら行動や。そこの小道をちょい行たとこに泉があるよって、そこで、染料つこて髪染めさせや。こんなとこにおったら、いつ人来るかわかれへん」

そのとおりだ。

ルアークは、顔をあげると、ゆっくりと、フィルデラにうなづきかけた。

※

ちゃぱ……ちゃぱ……
水音がする。
フィルデラは長い髪を水で濯ぐと、ゆっくりと、ルアークに手渡された染料をふくませた。
ええと……染料をまんべんなく髪にふくませたら、ゆっくり百数えろって言ってたわよね。
ひーい。
ふーう。
みーい。
よーお。
いーつ……。
指を折り折り、数を数え始める。
おかしな人……だったなぁ……。
くすり。
ルアークの『親友』、ディース・キャプタムと交わした会話を思い出し、フィルデラは思わず笑ってしまう。
でも、私とルアークさんが駆け落ちしてきただなんて、とんでもない誤解だわ……。
少なくとも、かどわかされてきた、というよりはまだましだけれども、どうしてそんな風に誤解されたのだろう……。
そこまで思考が及んでフィルデラは、自分がそう誤解されても仕方がない状況にいたということに、今ようやく気がついた。
そうだわ……私……もう少しでルアークさんと……。
みるみるうちにほほが染まっていき、耳まで真っ赤になる。
どくん……どくん……。
胸も早鐘をうつ。
どうして、私……。
少なくとも、ああいう状況で瞳を閉じるということは、口付けしてもいいわよ、という肯定の意味を示すということは、フィルデラ

も知っていた。
とにかく、あせりまくっていたとはいえ、自分は無意識中に、ルアークとキスしたいと思ったのだろうか？
私、ルアークさんのこと、好きなのかしら？
主観的には……解らない。
しかし、客観的に証拠のひとつひとつを検証していくと、どうも自分は、ルアークに恋愛感情を抱いているのではないかという結論に、達さざるを得なかった。
これが……恋……なのかしら？
そう認識した瞬間、フィルデラの心の中に、黒雲がわきあがるように、不安がたちこめだした。
ご迷惑じゃ……ないかしら？
フィルデラの心の中で、ディースのある台詞が反復される。
『わてらの仲間の中にも、ちょっとでも神殿に関りあるもんは滅ぼしてまえって言う過激なアホもぎょうさんいてるんやで、そんな奴等がやな、おまえが巫女さんと駆け落ちしてきたって知りよったら、どないなると思う？』
つまりは、自分はルアークの側にいるだけで迷惑をかけるのだ。
“過激なアホ”と、ディースは一刀両断しているが、フィルデラには彼らの気持ちが解るような気がした。
神の罪は許されるものではない、そして、そんな神に疑念も抱かずに従い続けて来た自分達の罪も……。
神に仕えている。
それだけの理由で憎まれていたとしても、至極もっともなことのように、今のフィルデラには思えるのだ。
その時！
（それは、違うわ！）
心の中に響く声、それは自分のものではない。
だれ？　あなたは誰？
突然心の中に割り込んできた侵入者に対して、フィルデラは厳し

く誰何する。
（ごめんなさい、またあなたを驚かせてしまったようね……）
あなたは……エメラーク……さん？
返事は肯定。
フィルデラの脳裏に送られるエメラークの意識は、封邪の間で卵を預かったときの、何倍も力強い。
弱々しく、今にも消え去りそうだった封邪の間の時とは違って、はっきりと“ことば”として形成されている。
もしかしたら、彼女は力を取り戻したのでは？
だが……そのフィルデラの淡い期待は、すぐに打ち砕かれた。
（お別れの挨拶を、言いにきました……）
エメラークの声が淡々とフィルデラの脳裏に響く。
……エメラークさん！
（本当に、あなたは優しい方ね……。ほとんど知らない私のことを、こんなに想ってくれているなんて……）
哀しみに満たされたフィルデラの心を、逆に、死にゆくエメラークが慰める。
そのエメラークの思念は純粋な優しさに満ちていた。
『おまえ等が彼女の何を知っていると言うんだ！』
ルアークの、怒りの言葉。
それが何度も、なんども、フィルデラの心の中でリフレインする。
私達は何も知らなかった、知ろうとさえしなかった……。
彼女の……彼女のどこが邪悪な存在だって言うの？
自分の愚かさが悔しくて、フィルデラはぽろぽろと涙をこぼす。
（泣かないで……泣かないで……）
困ったようなエメラークの思念。
（私のために、泣かないで……）
エメラークさん……。
暖かな思念に包まれて、フィルデラは涙をぽろぽろとこぼしながらも、小さく微笑んだ。

（フィルデラさん、息子をよろしく頼みます……）
静かだが暖かく深い、母としての思いを秘めたエメラークの思念に対して、フィルデラは神妙な面持ちで誓いをあげる。
「はい、私が責任を持って、育てます」
その時フィルデラの脳裏に、ちょっとした疑問が浮かんだ。
息子……さん、なんですか？
竜は産まれる前に性別が解るのだろうか？
フィルデラの疑問に、エメラークが笑って答える。
（ええそうよ……その子は男の子。名前はディーフィルといいます。もし私に似たならば、やんちゃで手のかかる子になると思うけど、よろしく頼みます）
その思念の中に秘められた、エメラークの我が子に対する愛情の深さに、また、フィルデラのほほを涙が伝いだす。
あなたの想い、必ずディーフィルくんに、伝えます。
だから、だから安心してください。
わたしが、あなたに出来ることは、これだけ、なんですから……。
フィルデラの必死の思いにうたれて、エメラークの思念が、柔らかく舞った。
（あなたは本当に素晴らしい女の子ね……。ルアークにはもったいないくらい……）
「エメラークさん！」
突然話を“そっちの方”にふられて、フィルデラは思わず声をあげた。
（ふふふっ）
フィルデラの初心な対応に、エメラークの思念が微笑むように揺れる。
（フィルデラさん。ルアークもよろしく頼みます。あの子は、あなたを必要としています。フィルデラさん……あの子は、決して悪い子じゃありません。ですけど……危険すぎるんです。あの子の力は、大きすぎるんです。もし、あの子が理性を手放したら、この世界は

滅びます。神への憎しみが、すべてへの憎しみに転化したとき、あの子はすべてを滅ぼします。さっき、なぜあなたの思考を否定したか、その意味が解りますか？　光の恩寵深いものが必ず正義であり、闇の恩寵深いものが必ず邪悪である。この図式が間違っていることは、今のあなたには明白でしょう。ですけど、これも知っていてください。被害者が総てにおいて正しく、加害者は総てにおいて間違っている。これも決して正しくないということを。被害者だからといって、無差別に憎しみをぶつけるならば、その時点で、あの、恐ろしい光に満ちた存在、加害者である神と、同じ過ちを犯すことになります。心に、憎しみという感情は必要不可欠なものです。ですけど、過度の憎しみは、心自体を狂わせます。あの子の憎しみを、あなたの愛で中和してあげてください。あの子には、あなたが必要なんです。あの子の孤独な心には、愛するものが必要なのです……）

エメラーク……さん？

そんなことおっしゃられても……。

私はともかく、ルアークさんがどう思ってらっしゃるか……。

（ごめんなさい……。突然、こんなことを言っても、戸惑うだけですね。もっと、ゆっくり伝えられればよかったのだけど……もう、時がありません。フィルデラさん、さようなら、あなたの前途が、幸福で彩られんことを……）

祈っています……。

残るのは、暖かな感触。

エメラークの魂の残した、あたたかな感触。

「エメラークさん……」

空を静かに見上げるフィルデラの濡れたほほに、風が冷たかった。

※

少し離れたところでフィルデラを見守っていたふたりは、彼女の様子がおかしいことに気付いた。

駆けってきたルアークの胸に、呆然と立ちすくんでいたフィルデラがすがりつく。
「ルアークさん。エメラークさんが……エメラークさんが、いま……」
亡くなられました……。
すべてを言葉に出して言う必要はなかった。
ルアークはぽろぽろと涙をこぼすフィルデラを、力強く抱きしめた。
「ルアーク、どういうことなんや！　エメラークに、何ぞありよったんか？　助けだせなんだことは解ってた。成功してたら、真っ先にわいに教えへんはずないもんな……。せやけど、フィルデラちゃんも……いったいどないなってんねん。まさかとは思うけど、ほんまにまさかとは思うけどエメラークは……」
そう言うとディースは、フィルデラの手首をつかんで乱暴に振り向かせた。
これまで、不敵な態度を崩すことのなかったディースの、フィルデラの手首をつかんだその手が、ぶるぶると小刻みに震えていた。
「なにがあったんや？　ほんまに、何がありよったんや……」
何かに脅えるように、ディースはつぶやく。
「ディース……」
「ディースさん……」
これは、私の義務だ……。
ディースにすべてを語るのは、彼女の、フィルデラの義務なのだ。
フィルデラは視線でルアークを制すと、ディースに向かい合った。
「お話しします。私が、知る限りのことを……」
ディースの瞳が、まっすぐにフィルデラに注がれた。
※
「さよか……」

フィルデラの説明が終わった後、感情のない能面のような表情のディースから、力なく、言葉がこぼれた。
「私は、私達は……」
ぽろ……ぽろ。
涙をこぼしてうつむくフィルデラを見て、ディースの表情に感情が戻る
「フィルデラちゃん……あんたが、エメラークのことで、責任感じる必要は全くあれへん……。悪い奴ははっきりしとる。フィルデラちゃんも、そいつの被害者なんや。そやから気にしたらあかんで」
ディースはフィルデラに優しげな視線を向けると、その一瞬後には、いつもと同じ、どことなくふざけているような、不敵な態度を取り戻していた。
「それに、フィルデラちゃん……。はよ髪すすいだ方がエエで。急がんとせっかくの綺麗な髪。だめになってしまうで」
「えっ！」
やっぱりフィルデラも女の子。
だいじな、だいじな髪が、だめになってしまうと聞かされて、慌ててすすごうとする。
だが……。
あまりに慌てたために、足がもつれて、頭から小川に飛び込みかけて……。
「きゃあっ！」
「フィルデラ！」
もう少しで川に落ちる……。そこで。
とっさに反応したルアークが、フィルデラをしっかりと抱きかかえる。
しかし……しかし、手を添えた場所が悪かった……。
フィルデラの二度目の悲鳴が辺りに響きわたる。
「きゃあぁ」
そして水音……。

フィルデラはなく、ルアークが。
フィルデラを支えたルアークが、彼女の代わりに、小川で水泳することになった。

※

髪をすすぎ、水を切って布で拭いた。
しっとりと濡れたフィルデラの髪は、茶色く染まっても、光を反射してきらきらと輝いている。
「う～ん……。まあ、こんなもんなんやろけど。もうちょい、なんとかならんかなあ……。そや、フィルデラちゃん、眉毛や眉毛。眉毛がきんきんやから、不自然なんや。眉墨で染めたるから、ちょっとまっとり」
そう言って、背負い袋から眉墨を取り出し、指先につける。
そして、フィルデラの眉をその指でなぞり、染め付けた。
「よし、これでエエやろ。顔ゆすいどきな」
ディースはそうフィルデラに告げると振り返り、木陰で着替えているルアークを呼んだ。
「おい、フィルデラちゃんの方の準備は終わったぞ。そっちはどないや？」
「こっちも終わりました。今行きます」
そう言って、服を着がえたルアークが、こちらに向かって来た。
「あの……ルアークさん、すみませんでした。また……また、ご迷惑をかけてしまって……」
気にするなよ……。
しゅん、としてうつむいてしまった彼女を、ルアークがそう慰めようとしたとき、ディースがしれっとして、口を挟んだ。
「フィルデラちゃん……。あんたが、責任感じる必要は全くあれへんで。悪い奴ははっきりしとる。フィルデラちゃんも、そいつの被害者なんや。どさくさ紛れにフィルデラちゃんの胸を触ろとした、

このアホがみな悪い！」
そう言って、げしげしとルアークの頭をどつきまわす。
ふふっ。
その様子がおかしくて。
ついついフィルデラは、吹き出してしまった。
「笑ってくれたな……フィルデラちゃん。泣いとっても、しゃあないで。エメラークかて、そう思とるはずや」
「そうですね……」
泣いたって、エメラークは戻ってこない。
ディースの言うとおり、エメラークもそんなことは、望んでないだろう。
ぎこちなくではあったが、もういちど、フィルデラはにっこりと微笑んだ。
「それでエエ。フィルデラちゃん……ルアークも、荷物の準備はできたな。さあ、出発や」
三人は街道へ戻ると『俗都デルシス』めざして歩き出した。

～幕間～（前書き）

～幕間～

「ねえねえ、ラディアス君。この幻像、もうちょっとでいいから大きくならないかな？」
臨場感ってものが欠けているのよね……。
勝手に押し掛けて来ておいて、さらに好き勝手なことをおっしゃるリ・セルテレシアに、イフェ・ラディアスは険悪な視線を向ける。
が、リ・セルテレシアは気付かない振りをしているのか、本当に鈍くて気付かないのか、にっこりと微笑んでいらっしゃったりする。
はあ……。
重いため息をついて、頭を抱えるイフェ・ラディアス。
「ラディアス君。疲れてるんじゃない？　あんまり無理しちゃだめよ」
誰のせいだ、誰の！
喉まで出かかった罵声を飲み込み、さらにどんよりと沈みこむ。
「でも、ラディアス君。やっぱりこの幻像何とかならない？　せっかくおもしろいのに、こんなことで、そのおもしろさが削がれるのって、絶対もったいないわよ！」
だから……この幻像は楽しむためのものじゃないんだってば……。
しかし、言っても無駄だと解っていたから、口に出してはこう言った。
「リ・セルテレシア。俺の力では、これが限界なんです。これ以上を望むなら、あなたが自分で何とかしてください」
そう言ってしまってから、イフェ・ラディアスは、しまった！と思った。
そのイフェ・ラディアスの言葉を聞いた瞬間、リ・セルテレシアが嬉しそうに、本当に嬉しそうに微笑んだのだ。
「そうよね……あなたはあんまり幻像の扱い得意じゃないし、ここは私の出番よね。まかせて、すんごい幻像を見せてあげるから」

薮蛇だったか！
「そんなに脅えないでよ、ラディアス君。だいじょぶだいじょぶ。へまはしないから」
その言葉に……その言葉に……これまで何度泣かされて来ただろう？
どうやったらそんなことができるのか？　何がなんだかわけ解らない失敗をやらかして、いつも『ま、いっか』の一言で済ませてくれるのだ。
絶対に信用はできない。
が、しかし……。
こうなったらもう、誰にも止めることが出来ないのだということを、これまでの経験から、イフェ・ラディアスは熟知していた。
悲しいことに……。
……。
こんな時、人間ならば神に祈るのだろう。
だが、神である自分は何に祈ればいいのだろうか？
仕方なくイフェ・ラディアスは、自分自身の運に、祈りを捧げた。
何も、起きませんように……と。

※

アヤシイ呪言とともに、リ・セルテレシアの『力』がほとばしる。
イフェ・ラディアスは、その『力』に、向こうの世界から転送されてきた映像をリンクさせた。
精一杯の抵抗で、やっと勝ち取った妥協。
それが、映像を向こうからこちらへ転送する役目は、イフェ・ラディアスが行なうことであった。
それさえ握っておけば、リ・セルテレシアがなにか失敗をやらかしても、あの世界に悪影響を与えることはない……はずだ。
だが安心してはいけない。

これまでも、こうしておけば絶対大丈夫だろう、という処置を巧みにかいくぐって、彼女の失敗は、大勢の神に迷惑をかけてきたのだ。
今度もそうならないという保証が、いったいどこにあると言うのだろうか？
絶対に油断は禁物だ。
はあ……。
何度目のため息だろう。
そんな、イフェ・ラディアスを慰めるように、小川のせせらぎが聞こえて来た。
顔をあげると、辺りは小川のほとり、だった。
驚いて周りを見回すイフェ・ラディアスに、リ・セルテレシアは、悪戯っぽく笑いかける。
「どう、ラディアス君。凄いでしょ？」
確かに凄い。
小川のせせらぎ、鳥や虫の鳴き声、梢を揺らす風。
まるで、その場に自分もいるかのような臨場感がある。
これは幻像の域を越えている。
だが、それに伴うリスクを考えると、素直に感動することもできなかった。
「ソウデスネ……確かに凄いデスネ……」
なげやりに答えたイフェ・ラディアスの耳に、小川の対岸から悲鳴が二度響きわたった。
「きゃあっ！」
・
・
「きゃあぁ！！」
どぼーん……。
おまえも……可哀想にな……。
小川に突き落とされたルアークに、イフェ・ラディアスは奇妙な

連帯感を覚えて、もう一度小さく、ため息をついた。

四章

街壁も門もない街“俗都デルシス”。
俗にいわれているその言葉は正確ではない。
街壁も門もないわけではないのだ……。
ただしその街壁に達するには、市街に入ってから一刻は歩く必要がある。
つまり、もともと俗都デルシスは、そこを外周としていたのだ。
それがこんな状態になったのは、富を求めて各地から集まった人々が、勝手に住みついて、家を建て、無秩序に市街地を拡大させた結果である。あの凄い匂いは、下水道の整備も行わずに無秩序に拡がった市街地からもたらされたものなのだ。
現在では、壁の内側を“内俗都”、外側を“外俗都”と呼んで区別していた。
そして、その“外俗都”の膨張は今なお続いているのだ。

※

う～ん……やっぱり、ちょっとどころやなく、めだつなあ……。
込み合う通りをかき分けて進みながら、ディースは小さくため息をついた。
こんな人込みは初めてなのか、フィルデラはおびえるように、ルアークの腕にしがみついている。
ルアークは、そんな彼女をしっかりと周囲からかばっている。
微笑ましい光景ではある。
が。
やっぱり目立つのだ。
端正で鋭い、ルアーク。
繊細で優しげな、フィルデラ。

ふたりともタイプは違うが、ちょっとどころではない、美貌の持ち主である。
目立って当然と言えば当然なのだが……。
ルアークだけ、あるいは、フィルデラだけ、なら、ここまで目立っただろうか？
ふたりが一緒にいることによって、目立ち度は足されるのではなく、掛け合わされているような気がする。
う～ん……なんでやろ？
考えてみると、すぐにその理由が解った。
ふたりは、あまりにも“お似合い”なのだ。
ルアークの側にフィルデラがいる。
そのことがあまりにも自然すぎるのだ。
やばいなあ……。
いかにも、見せ付けるかのようなカップルと違って、この初々しいお似合いのふたりに対しては、好意的な視線が多い。
……が、しかし、やっぱり目立つのはまずい。
この“俗都デルシス”で目立つのは絶対危険だ。
どんなトラブルに巻き込まれるか解ったもんじゃない。
何も起こってくれるなよ……。
そのディースの心配は、ある意味において杞憂だった。
目立っていようと目立っていまいと関係ない。
そんなトラブルが、派手な音と共にやってきたのだ。

※

どんがらでんがらがっしゃんしゃ～ん。
凄まじい音声とともに、突然、道の側にあった屋台が倒れた。
その倒れた屋台の裏から、少女が飛び出し、一目散に逃げ出そうとするが、バランスを崩して、派手にすっ転んでしまう。
「いってぇ！」

ルアークが止める間もなく、フィルデラはすばやくその少女に駆け寄ると、助け起こしてしまった。
「大丈夫ですか？」
顔をあげた少女は、フィルデラと同い年ぐらいだろうか。
小麦色の肌に、切れ長の瞳と紅い唇が、印象的である。
「あっ、あんがと」
起き上がった少女は、礼もそぞろに立ち去ろうとするが……。
「いてっ！」
転んだ時に足を痛めたのだろう、苦しげに膝をつき、顔をしかめる。
「いたぞ、こっちだ！」
「やべ……」
もう一度立ち上がろうとするが、足をふんばった瞬間に、その少女はさらに苦しげな表情を浮かべる。
「いてててっ！」
「足を痛めたのね……」
またしても、フィルデラの反応は素早かった。
膝をついた少女に駆け寄ると、傷ついた右足首に手をかざしたのだ。
魔力が、かざした掌から、ほとばしった。
そして……。
少女は、既に自分の足から痛みが全く消えていることに気付いて、口笛を吹いた。
「やるじゃん……これ、あんたの力？」
にっこりとうなずいたフィルデラに、その少女にしてみれば最敬礼なのだろう、ぺこり、と頭をさげると、素早く立ち上がって逃げようとする。
が、遅かった。
いつの間にか、ふたりは……いや、ルアークを含めて三人は、いかつい風体の男達の集団に、囲まれていたのだ……。

※

「やべぇ……」

そう言って、顔をしかめた少女の表情は、ふたりを庇うように飛び出したルアークの姿を認めると、劇的に変化した、

「ルアーク！　ルアークじゃん！！」

少女は甘えるようにその腕に飛びつく。

えっ……えっ……？

ルアークにじゃれつくその少女に、対抗意識？　をかき立てられて、フィルデラも、しっかとルアークの腕にしがみついた。

なに、こいつ？

少女から、言葉に直せばそうなる、険悪な視線がフィルデラに注がれる。

しかしフィルデラには、なぜ自分がそんな視線を向けられなければならないのか、その意味が解らない。

きょとんとした彼女に注がれる、少女の視線がさらに険しくなった時……。

囲んだ男達のなかでも、リーダー格らしい男が口を開いた。

「おまえが黒幕か。両手に花でいい身分だな、ええ、おい」

いやらしい笑みを浮かべ、男がにじり寄って来る。

しかしルアークは動じない。

嘲笑さえ浮かべるルアークの態度が気に入らなかったらしい。男は怒りをみなぎらせ、声を荒らげた。

「このヒモ野郎が。いきがるなよ！　俺達はフィデンス自警団のものだ。その馬鹿なガキは、こともあろうにこの俺様から財布を盗みやがったんだ。そのガキは窃盗罪、おまえは窃盗教唆罪だ。痛い目にあいたくなかったらさっさとお縄をちょうだいしろ！」

自警団員か……やっかいだな……。

ルアークは舌打ちすると、傍らの少女に呆れたような視線を向け

た。
自警団……はっきり言えば、身分を保証されたヤクザである。
治安協力費という名のショバ代を受け取って、犯罪者を取り締まることを生業としているヤカラである。
普通のヤクザ以上にタチが悪いのが、その行為が、神殿議会から保証されているということだ。
自警団にだけは手を出すな、というのはこの街の住民にとって、常識以前の問題である。
しかし、ルアークの険悪な視線にも少女は全く悪びれた様子もなく、ぺろっと舌を出して見せた。
そして、怒りをみなぎらせている自警団員に向けて、挑発的な台詞を吐く。
「ボクはあんたの財布なんか盗んでないぜ！　何を証拠にそんなことを言うんだよ！」
「何を！　……お前が俺にぶつかってきたとき、俺の懐にこう手を差し入れて……」
そう言って男は懐に手を差し入れると、懐の中からくだんの財布を取り出した。
「この財布を……あれ？」
「あるじゃん」
男に、同僚から冷たい視線が突き刺さる。
「い、いや。これはおまえが、金を抜き取った後、戻したからに違いない。ジル、おまえ、俺のこの財布の中に2ギアス、入っていたのを覚えてるな？」
「へい」
その男の弟分らしい、ジルと呼ばれた小男が、うなずいてみせる。
男は財布の中身を大きな掌にぶちまけると勘定をする。
「見ろ……今この財布には、これだけしかない、銀貨が2枚と銅貨が……あれ？」
ギアス銀貨が2枚に小銭の銅貨が何枚か。ちゃんと2ギアスある。

「ちゃんと、あるじゃん。なんだよ！　言いがかりつけやがって！　誰が誰の財布を盗んだんだって？　さあ、もう一度言ってみろよ！」
くっくっくっ……。
遠巻きに見守る野次馬達から、忍び笑いが漏れる。
あほらし……。
同僚達も呆れ果てたのか、他人の振りをして、ひとりまたひとり、と去って行く。
その間、返答に詰まって、押し黙っていた男の顔は、ゆっくりと真っ赤に染まっていった。
数瞬の後、男はやっと自らを正当化できる根拠を見つけて、大声でそれを主張する。
「きさま！　それならなぜ俺から逃げようとしたんだ！　逃げようとしたのはきさまにやましいことがあったからだろ！　そうだ、そうに違いない。この凶悪犯め。俺に恥をかかせやがって！　きさまらみんな逮捕してやる！」
ぷつん。
「あっ……切れた」
少女の言うとおり、怒りのあまり男の単純な思考回路が切れたらしい。
こめかみに青筋を浮かべて、三人に向けて突進して来る。
「うおぉぉぉぉ」
「ルアーク！　たのんだよ」
そう言って少女はにっこりルアークに微笑みかけると、くるりと表情をかえ、フィルデラに対する。
「さあ、あんたもいつまでルアークにしがみついてるんだよ！　ルアークの邪魔になるだろ……こっちへ来いよ」
まだ呆然としているフィルデラを、憮然とした表情でルアークから引きはがした。
ルアークは苦笑すると、突進して来た男に対する。

男に対するルアークは、隙だらけ、に見えた。
間近に男が迫って来ているのに、なんの構えもとろうとしない。
男に弾き飛ばされるかに、見えた時……。
素早くルアークの足が地を蹴った。
一瞬で……ほんとうに瞬きするほどの時間で、あっけないほど簡単に勝負はついた。
男は文字どおりルアークに『片付けられ』て、悶絶しながら地面に転がっている。
何が起こったのか、それさえ把握出来ずに目をぱちくりさせているフィルデラに、少女が得意げに解説してくれた。
「見た見た？　あの早業。まずは足払い。そして、バランスを崩した所に、すかさずあごをかすらせるように拳を放ち、そのまま肘を叩きこむ。さらにのけぞった所に、とどめの蹴りを鳩尾へ。うーん、やっぱりルアークは凄いなあ……」
ルアークへの好意を隠そうともせず、少女は、彼の活躍を我が身のことのように喜んでいる。
この人も……この人もルアークさんのことが好きなんだ……。
思わぬライバルの登場に、フィルデラの表情は知らず強ばっていた。

※

「そこまでやな……」
ルアーク曰く『ディースはいつもいつも、おいしい所であらわれる』のだそうだ。
今日、このトラブルにおいて考察する限り、そのルアークの主張は、正しいことのように思える。
自警団員の男が、ルアークに叩きのめされたと見るや、彼は、どこからともなく湧いて出て来たのだ。
ディースは独り残った小男、ジルの方に向き直ると、にやりと笑

った。
「相手が悪かったな。ルアークに素手で挑みかかるやなんて、あんたの兄貴分もアホなことしよる」
「あっ……あなたは……」
その言葉はディースに向けて発されたのではない。
ディースと一緒に現れた青年に向けて発されたのだ。
その青年はジルを一瞥すると、まだ地面で悶絶している男に、冷たい視線を向けた。
「情けないことだな……貴様、確かロバンとか言ったな。貴様のことは、フィデンス自警団長に伝えておく。ま、どういう処分が下されるかは知らんが、少なくとも指の一本は覚悟しておけ。本当は、おまえのような恥さらしには、自警団から消えてもらうのが一番いいんだがな……」
「コロネルの若頭、見逃してくだせえ……。お慈悲を……」
「おまえは本当に何も解ってはいないようだな……」
こういう輩が、多くて困る。
ルアークが歳を重ねたらこうなるのではないか、という抜き身の刃を思わせる雰囲気の青年は、そう呟いて大仰に肩をすくめてみせた。
「もう“コロネルの若頭”などという肩書きは、どこにも存在していない。今の私は『外俗都下地区自警団副総長』だ」
冷たく言い放つ青年に、ロバンは、さらに卑屈に頭をさげる。
「す、すんません、副総長様。どうか、どうか、お許しを……」
『外俗都下地区自警団副総長』は、ロバンのこれ以上ないほど卑屈な態度に、心底からの嫌悪の表情を浮かべた。
ディースはその様子をにやにやと笑って見ていたが、とりなすように口を挟む。
「ま、ヴェイグ。それくらいで許しといたれや。こいつも反省しとるようやし。まあ減俸くらいですむようにしたりや」
ディースの言葉に力を得て、ロバンは、さらに、さらに、これ以

上卑屈にはなり得ない態度で、地に顔を擦りつけながら哀願する。
「お願いします……これからは気をつけますから、どうか、どうか、お許しを……」
ア……アホが……。
その卑屈な態度が、さらにヴェイグの怒りを煽っているのが解らないのだろうか？
ぴくぴく……。
ヴェイグのこめかみが小刻みに震えてきているのを見て取って、ディースはもうお手上げや、という感じで手をあげた。
「失せろ……」
地獄の底から響くような声。
「はい？」
間抜けな表情で、顔をあげたロバンの顔が、一瞬後には、恐怖に凍り付く。
「私にたたっ切られたくなかったら、さっさと失せろといっているのだ。このたわけ者めが！」
「ひっ、はいぃ！」
悲鳴とも返事ともつかぬ奇声を発しながら、ロバンは弟分をつれて、転がるように逃げていった。
「ひゃあぁはっはっはっ」
そのロバンの間抜けなサマをみて、少女は笑い転げる。
ヴェイグも、その痛快な笑い声に思わず表情を緩め、少女の方に向き直った。
「君にはすまないことをしたな。私が代わりに謝ろう」
そう言って、頭を下げようとするヴェイグを、少年は慌てて止めた。
「いいえ、あなたに謝ってもらうなんておそれ多い。ヴェイグさん。顔をあげてください」
そう言う少女の表情には、明らかな崇拝の表情が浮かんでいる。
仁義の人ヴェイグ。

この外俗都で彼の名を知らぬ者はないだろう。
堅気の者には絶対手を出さない。
たとえ、身内の者でも、筋の通らないことをした者に対しては、きっちりけじめを付けさせる。
古き良き無頼者の仁義を守り通す、男の中の男。
そのヴェイグが、外俗都でも有力な犯罪組織“コロネル”の若頭になったのは、1年ほど前のこと。
しかしその彼に、半年前、さらなる転機が訪れた。
神殿による、犯罪組織の公認。
神殿と、有力な犯罪組織の幹部によってなされたその決定に、彼は最初、断固反対していた。
自らを引き立ててくれた“コロネル”頭取……その決定の中心人物であったゲインフル・リュシナンドに、激しく抗議さえしたのだ。
だが、説得されたのはヴェイグの方だった。
その後、彼は“外俗都下地区自警団副総長兼、コロネル自警団長”となり、自ら積極的に犯罪組織の自警団化を推し進めたのだ。
“神殿の犬”
彼に失望した人々に、そう呼ばれたことさえあった。
自警団……名前は変わっても、中身は全くもとのまま、それどころか、以前述べたように、神殿の公認を得た分、さらにたちが悪くなって、人々を苦しめたからだ。
だが人々は、やがて、ヴェイグはやはり仁義の人であったことに気がついた。
ヴェイグが団長を兼務した“コロネル自警団”は、それらの他の自警団と全く違っていたからだ。
自らに厳しく、他者には公平。
その清新な態度は、人々に拍手喝采で迎えられた。
半年たった今、“コロネル自警団”の担当地区である下地区の港に近い区域は、神殿が治安維持活動を行っている内俗都も含めたうえで、『俗都デルシスでもっとも安心して暮らせる街』となってい

た。
そして、仁義の人ヴェイグの名声も、以前に増して高まったのだ。
その憧れの雲の上の人ヴェイグが、こうして目の前にいる。
少女は思わずほほを紅潮させた。
「名は何と言う？」
「フィシス。フィシス・ブレイズ、っていいます」
はきはきと答えるフィシス。
その少女の熱い視線を受け止めて、ヴェイグはさわやかに笑った。
「それではフィシス。もし、あの男がおまえに仕返しを企むようなら、私に伝えて欲しい。もしそこまであの男が腐っているようなら……」
容赦はしない……。
一瞬、研ぎ澄まされた刃物を思わせる殺気を発したヴェイグに、フィシスは思わず身を震わせてうなずいた。
ヴェイグは、振り向くとディースの方に向き直り別れを告げる。
「それではディース、私は用があるのでもう行かねばならない。失礼する」
そう言って、かっこよく立ち去るヴェイグの後ろ姿に、フィシスは、ぽぉっとして見蕩れた。
そんなフィシスの後頭部を……。
ぱっこーん、ぱこぱこぱっこーん。
立ち去るヴェイグが、人ごみの向こうに見えなくなった時、ディースは、おもいっきり、しばきまわした。
※
「いってぇ……なにするんだよ！」
「いやな。おまえの後頭部がやな、わしにどついてくれ、しばいてくれと、言わんばかりやったからやな。しゃあないでどついたったんや」

「ひっでぇ……頭悪くなったらどうしてくれるんだよ！」
「大丈夫や。おまえの頭はすでに十分おかしい。これ以上は、おかしいなりようがないから安心せえ」
そう言ってディースは、フィシスの頭を抱えると、ずりずりと人気のない路地に引きずり込み、さらにげしげしとその頭をどついた。
「それに……こいつはもらっとくで……」
ディースはひょいっとフィシスの懐に手を伸ばすと、何かを取り出した。
書状、の様に見える。
フィシスが、あの男からすりとったのはこれだったのだ。
「返せ！」
そう言って伸ばされたフィシスの手を軽く避け、ディースはその書状に視線を落とす。
その表紙に書かれた署名を見て、一瞬、ディースの表情が変わる。
「なるほど……そないなわけやったんか……」
そのディースの様子を見て取って、フィシスは得意げに胸を張ってみせる。
「そうだよ……あの男がオルトから、この書状を託されたのに気がついて、後を付けてすりとったんだ。これを見ればオルトの裏切りが証明されるはずだよ！　……だけど、あの自警団員、本当に馬鹿だったよな……すられたのは書状なのに、財布だと勘違いしたりして……」
そう言って笑うフィシスに、冷水を浴びせかけるように、ディースは仏頂面で言葉を紡ぐ。
「その男に、すったことを気付かれたのは誰やろな？　勘違いしてくれたからよかったものの、そやなかったら大変なことになってた所や。それにやなあ、おまえには言うてなかったけど、オルトは泳がせといて利用する手筈になってたんや。そやのに、おまえがこないなアホなことしてくれたおかげでそれもパーや。誰が書状を盗んでくれ言うた。おまえは、それとなくオルトのことを探れ、とだけ

命令されてたんとちゃうんか？」
ディースの鋭いつっこみに、思わずフィシスは口ごもってしまう。
「だって……」
「だってもくそも、ないわい！」
ぱこぱこーん。
またもやディースはフィシスをしばくと、さらに拳を振り上げる。
「ディースさん！」
やめてあげてください。
そう言って止めに入ろうとしたフィルデラを、ディースはしたり顔でたしなめる。
ちっちっちっちっ。
「甘い、甘いで、フィルデラちゃん。こいつに甘い顔見せたらあかん。こういう奴にはな、こうやって身体で覚えさせるんが一番なんや」
「いいえ！　そんなことはありません」
きっぱりと言い切るフィルデラ。
思わぬ加勢に、フィシスは勢いを得てディースに反撃する。
「そうだそうだ！　こんないたいけな少年をいじめてなにが楽しいんだよ！」
その言葉に、フィルデラは驚いて、フィシスを見つめた。
「少年……って、」
男の子。なの？
フィルデラの問いに、フィシスはむっとして答える。
「それ以外の何に見える？」
えっ……えっ？　だってさっき……。
「だって……あなた……ルアークさんのこと……」
そのフィルデラの問いに、フィシスはこれ以上ないくらい、不機嫌な表情で答える。
「だったら、何か悪いことでもある？」
えっ……。

常識外の返答に、呆然とするフィルデラ。
そんな彼女に変わって、ディースが力強く答える。
「悪いにきまっとるやろ！　このアホが！」
げしっ。
おもいっきり、拳固を食らわせた。
「いてえ！」
大袈裟に痛がるフィシスを、ディースはさらにげしげしとどつきまわす。
「フィシス、よう聞きや。ルアークにもな、こうしてフィルデラちゃん言う立派な彼女が出来たんや。おまえも男やったらな、きっぱりルアークのことはあきらめい。笑ってふたりを祝福したりや。解ったな？」
ディースの誤解を含んだ発言を、思わずフィルデラが訂正しようとした時。
フィシスは必死の面持ちでディースの懐から抜け出し、他人のフリをして事態の推移を見守っていたルアークの方に向かった。
「ルアーク！　ディースの言うこと、本当なの？　本当に、あの女のこと好きなの？」
そのフィシスの問いに、ルアークは……
「ああ」
重々しく、うなずいた。
フィシスの表情が、悲痛に歪む。
じわ……。
涙をにじませて、ぺたんと地面にへたりこんだ。
だが、彼以上に、そのルアークの返答に衝撃を受けた人間が居たのである。
その人物、フィルデラは、フィシスと同様に、思わずその場にへたりこんでしまった。
※

「フィルデラ……君にはすまないことをした……」
フィシスに自分をあきらめさせる為に、ひと芝居うったんだ……。
ルアーク達の住居に帰り、ディースが気を利かせてくれたために
ふたりっきりになってしまった後、開口一番、ルアークはフィルデ
ラにそう告げた。
「そう……だったんですか……」
フィルデラはそのルアークの言葉に安堵を感じながらも、胸がき
ゅっと締め付けられるような痛みを感じた。
私……期待してたんだ……。
ルアークに告白されること。
ふたりっきりになった後、彼女は、夢心地で、それを期待してい
た。
そして、フィシスにたいしては、傲慢な罪悪感、を感じていた。
私……わたしって……本当に馬鹿だ……。
「そう……ですよね……私なんかが、ルアークさんにふさわしいわ
け、ないのに……」
「フィルデラ？」
「あっ」
思わず口を押さえるがもう遅い。
私、私ったら、なに馬鹿なこと口走って……。
ほとんど、ルアークが好きだ、と告白したに等しいではないか…
…。
「あの……私……わたし……」
かぁ……。
頭に血が昇り、思考はほとんどパニック状態になってしまって…
…。
恋を成就させるのは情熱よ！　押して押して押しまくるの！
またしても、テレシアの言葉がフィルデラの脳裏に浮かんだ。
えーい、もう、言っちゃえ！

「ルアークさん……ルアークさんの本当の気持ちを聞かせてください。私はルアークさんのことが……」
好きです……。
その言葉を、続けることはできなかった。
ルアークの表情。
視線を逸らし、苦しげにうつむいたルアークの表情。
それが、返事だ……。
昂ぶったフィルデラの感情が、瞬間的に凍った。
そうよね……私なんか……。そばに居るだけでご迷惑なのに……。
「ごめんなさい……ルアークさん……忘れてください」
フィルデラは、そう言って、笑いかけたつもりだったが……。
ぽろ……。
涙。
あれっ？
ぽろ……ぽろ……。
止まらない。
凍った感情が、今度は嵐となって、荒れ狂いだした。
私……わたし……。
居たたまれなくなって、駆け出すフィルデラ。
たたたた……。
ずでんっ。
なにもないのに、器用につまずいてこける。
痛い。
痛い……だけど、それ以上に、心が痛い。
「フィルデラ！」
助け起こそうと駆け寄るルアーク。
ルアーク……さん？
ずきん。
心が痛い。
ルアークの側には居られない。

差し伸べられた手を振り払って。
フィルデラは立ち上がった。

※

「あ〜あ、フィルデラちゃん泣かしてしもて……おまえ、ほんまアホな奴やなあ」
呆れたような表情でディースは、さらに言葉を継ぐ。
「ルアーク、いきなり押し倒すかなんか、悪なことしよったんやろ？　いくら好きやからゆうても、いきなり押し倒すんはあかんで。ああゆう純情なコはゆっくり責めんと……。あせったらあかん。解ったな？」
誰もが……誰もが自分と同じ思考回路で行動するとは思わないでほしい。
著しい誤解を含んだ発言に、ルアークは怒りのあまり、声をあげる。
「あなたと一緒にしないでください！」
「なに怒っとるんやルアーク？　冗談や、冗談。おまえにそんな度胸ないんは、ちゃんとわかっとるわ。おまえ、ほんまにギャグを理解せえへん奴やなあ……」
ぷるぷるぷる……。
怒りのあまり拳を震わせるルアークに、突然、ディースはシリアスな表情をしてみせる。
「ま、冗談はこれくらいにしてやなぁ。ルアーク、おまえ、なに考えてるねん？」
思わず見返すルアークに、ディースは言葉を継ぐ。
「さっきのやりとりは、みな、見せてもろたわ。あんな言い方したら、フィルデラちゃん傷つくに決まっとるやないか？　おまえも、フィルデラちゃんのこと好きなんやろ？　照れてんのは解るけど、好きなら好きやって、ちゃんと言ったりや。女の子の方から言わせ

て、返事もようせんなんて、最低最悪やで」
ディースの言葉に、ルアークは哀しげにうつむいた。
……。
「俺は……彼女にふさわしくないから……」
それだけ、それだけをやっとのことで喉から絞り出す。
「彼女を、幸せにする自信がないから……。いや……俺は、彼女を絶対に不幸にする……。母を不幸にした、父のように……」
「ルアーク？」
ディースは怪訝そうな表情で、ルアークを見る。
ルアークの母のことは、エメラークから断片的に聞いたことがあるだけ、しかもその内容は、神に仕えるものに異端として殺されたらしい、それだけだった。
ルアーク本人の口から両親の話が出たのは、長い付き合いの中でもこれが始めてだ。
ルアークも、そのディースの不審そうな表情に気付いたのだろう。
ぽつり、ぽつりと、ディースに説明をはじめた。
「ディース……俺の母は、姓を……ディシフォンと言った」
「ディシフォン？　……まさか、あの、ディシフォン家のことか？」
驚きに彩られたディースの質問に、ルアークは小さく、うなずき返す。
ディシフォン家。
リバートゥ家、ドルネプラ家、テューンシィ家、そして、リファンディエント家と並ぶ、光の恩寵深い貴族の名門、五光公家のひとつである。
「俺も、母のことは良く覚えていない……だけど、フィルデラと出会うことによって、断片的にしか覚えていなかった母の思い出が、ひとつにつながったんだ……。母は、光神殿の巫女だった。母も、俺が神殿からフィルデラを連れ出したように、父によって連れ出されたに違いない。そして、父は、母を護りきることはできなかった。いや……生あるうちは、命を賭して、母を護ったのかもしれない。

母はよく言っていた……。父は、遠い世界に住む高貴な方だから私達とは一緒に居られないんだと……。それは、幼い俺に対する、父の死という事実を知らせないための、配慮だったんだろう。だが、何にしても……。結局、父は、母を護りきることはできなかったんだ」

ルアークは唇を噛みしめ、厳しい表情で虚空を見据えた。

握った拳が、小刻みに震えている。

「母は、よく、父のことを俺に話してくれた。父に会わなければ、自分は何も知らないまま罪を重ねていただろう。そう言って母はいつも、微笑んでいた。父に対する、深い信頼と愛情をこめて……。ずっと、忘れていたそのことを、俺に思い出させたのは、フィルデラだった。彼女は、フィルデラは、俺に微笑みかけた……。母が父に向けたのとおなじ、深い信頼を込めた目で……俺に微笑みかけたんだ！」

だんっ！

握った拳を……ルアークは、おもいっきり机に叩き付けた。

皮が破れ、血がにじむ。

しかし、ルアークは全く痛みを感じていないかのように、さらに言葉を紡いだ。

「俺には、そんな資格ないのに。こんなちっぽけな俺が、彼女にふさわしいわけないのに……どうして……」

どうして、彼女は？

そして……どうして、俺は？

「解っている……。そんなことは、わかりきっているのに……。たとえ、手に入れても、幸せにすることは出来ないのに……できるわけないのに……。情けない俺は、未だに彼女を求めている。自分自身のために彼女を求めているんだ！」

ルアークはもう一度、拳を机に叩き付けようと振り上げる。

「ルアーク……やめい！」

その振り上げた拳を、ディースは真剣な表情で、つかみ止めた。

「……机が壊れる」
「……」
真顔でボケをかましたディースに、ルアークの激発した感情も中和されたのか、哀しげにではあったが、救われたように微笑んだ。
「俺も……あなたのように強くなれたら……」
いつもふざけたような言動をしているが、エメラークの死を知ったディースの瞳の奥には、ある思いが焔となってともっていることに、ルアークは気付いていた。
青く、蒼く、静かに燃えるその焔には、憎しみも怒りもない。
あるのは決意。
必ず、神を弊すと言う決意。
その焔の清烈さは、ルアークの心を灼いた。
俺の瞳に焔が灯っていたとしても、それは醜く歪んでいるのだろうな……。
憎しみ、怒り、劣等感。それらの負の感情がとぐろを巻いて、自分の心の中に渦巻いていることに、ルアーク自身気付いていた。
フィルデラによって気付かされたのだ……。
「ルアーク……」
何か言いたげに口を開こうとするディースを遮って、ルアークは静かに告げる。
「ディース……ひとりにしてくれませんか……ゆっくり、考えてみます。いろいろなことを……」

※

やっと、涙が止まった。
荒れ狂っていた心も、少しづつ、落ち着いてきた。
それでも……。
彼のことを想うたびに胸が苦しくなる。
心が張り裂けそうになる。

あの、ルアークの哀しげな表情。
あの表情が、脳裏から離れない。
本当に……ほんとうに、私ってばかだ……。
私なんかが、こんな私なんかが、ルアークさんにふさわしいわけないのに。
ルアークにとって自分は、足手まとい以外の何者でもなかったはずだ。
それなのに、昨日出会っていきなり、神殿から連れ出してくださいと言ったフィルデラの望みを、彼は誠実な態度で果たしてくれた。
たった一日、出会ってからたった一日で、自分は彼にどれだけ助けられ、どれだけ迷惑をかけたのだろう。
光獣に襲われた時、愚かさから自業自得に命を落としそうになった自分を、彼は身を挺して庇ってくれた。
そんな彼に自分はどんな仕打ちをしただろうか？
自らの罪を知ろうともせず、自分のために背負わざる負えなかった彼の罪を、さも自分は正しいかのように責めたてたのだ。
軽蔑されても仕方なかった。
軽蔑されたと思っていた。
だけど……それは、彼の自分に対する配慮だったのだ。
その配慮のおかげで、フィルデラは自らの罪を乗り越えることができた。
ルアークの犠牲の上に、フィルデラは新しい一歩を踏み出すことが可能になったのだ。
そして自分は、分不相応な願いを持った。
彼にずっと側に居てもらいたい。
ずっと彼に支えていてもらいたい。
どうして自分はルアークと出会ってしまったのだろう？
もう、ひとりでは歩けない。
自分にはルアークが必要なのだ……。
ルアークにとって自分がどんなに迷惑でも、彼の側に居たい。

そう考えている自分の心の弱さに、フィルデラはたまらなくなってうつむいた。
自己嫌悪の泥沼に、フィルデラがはまり込みそうになった、その時。
バタン。
突然、扉が開かれた。

※

フィシスが扉を開けると、そこには“恋敵”が居た。
ルアークのためにも、きっぱり諦める。
そう、決心はしたものの、やはり彼女を目の前にすると、どろどろとした昏い感情に心を支配されてしまう。
フィシスは、驚いて自分を見つめる彼女に、険悪な視線を向けた。
「なぜあんたがここにいるんだい？　確かここは、ボクの部屋だとおもったんだけど、気のせいだったっけ？」
フィシスは皮肉をこめた口調でそう言うと、フィルデラを睨みつける。
「……ごめんなさい」
フィルデラは、恥じるようにうつむくと、立ち上がり、足早に部屋から立ち去ろうとした。
おや？
「待ちなよ」
脇をすり抜けようとした彼女の腕をつかみ、振り向かせてみる。
目が赤い。
涙のあと？
何故、彼女が泣かねばならないのだろう？
泣きたいのは自分の方なのに……。
「嬉し泣きでもしてたの？　目が赤いよ？」
フィシスの皮肉に、フィルデラは哀しげにまつげを伏せた。

じわ……。
瞳から涙がこぼれ、ほほを伝う。
「わっと……泣くなよ！　ボクが苛めたみたいじゃないか……」
しかし、どうして彼女はこんなに哀しげに泣いているのだろう。
あれからルアークとの間に何かあったのだろうか？
喧嘩して、もう別れちゃったとか？
自分に都合の良い解釈がぽんぽん飛び出してきて、ついフィシスはフィルデラにたずねてしまう。
「ルアークと何かあったの？」
その言葉に顔を上げたフィルデラは、ハンカチを取り出して涙をふくと、何かを訴えかけるような表情で、フィシスを見つめた。
「なんだよ！　何か言いたいことがあるならさっさと言えよ」
そうフィシスが急かすと、フィルデラは数瞬の間とまどっていたが、やがて、決然とした表情で言葉を紡ぎ始める。
「フィシスさん……これから私の言うことを、聞いて下さい」
フィシスは呪縛されたように、彼女の真剣なまなざしを受け止めた。

※

「ひどいよ！」
怒りもあらわに、フィシスは声を上げる。
「フィシスさん、ルアークさんはあなたのためを思ってそうしたんです……。だから……」
フィルデラは、そんなフィシスをなだめようとそう言ったが……。
その言葉はフィシスに烈しく遮られてしまった。
「違うよ！　ボクに対してだけじゃない！　君に対してひどいってボクは言ってるんだ！　ボクが邪魔なら邪魔だって、ボク本人に言えばいいじゃないか！　本当に、君に対してこんなに失礼なことはないよ！　ボクはルアークを見損なってた！」

「フィシスさん……。本当にルアークさんはあなたのためを思ってそうしたんだと思います。そして、私にその協力を求めたのは、それだけ私のことを信頼してくれてらしたんじゃないでしょうか？ただ、ルアークさんは御存じではなかったんです……。私がルアークさんのことを好きになってたってことを……」

その、フィルデラの哀しげな表情に、フィシスの怒りも水を注された形になった。

「そう……だよね。ルアークってそういうことに関してからっきし鈍いから……。だけど、どうして君は、その、ルアークの信頼とやらを裏切ってまで、ボクにこのことを教えてくれたんだい？」

少し皮肉げなフィシスの質問に対して、フィルデラは自嘲するような笑みを浮かべ、言葉を紡ぐ。

「私も……ルアークさんに振られてしまったから……。涙が止まらなくて、心が張り裂けそうで……。あなたもこんな思いをしていると思ったら、少しでもそれを和らげてあげたいって……。そう、思ったんです」

そう言って、小さく笑うフィルデラに対して、フィシスは困ったような表情をして苦笑した。

「お人好し……」

「はい？」

「君がお人好しだって言ってるの。卑怯だよ、絶対……。ライバルなのに、恋敵なのに、こんな配慮されたら、君のこと嫌いになれないじゃん……」

「ごめんなさい……」

「だぁから、何でそこで謝るの？　謝る必要なんか全然ないのに」

フィシスはからかうようにそう笑うが、フィルデラは真剣な表情でそんなフィシスを見つめた。

「いえ、本当に私、あなたに謝らなければならないことがあります。さっきは本当にすいませんでした。あなたの性別について勘違いしてしまって……。私、同性を好きになるってことがあり得るってこ

とに気付いてなかったんです。ですけど、自分にあてはめて考えてみて……。もし、私が男として生まれていても、ルアークさんのことを好きになったかも知れないって思いました……。自分がどんな立場にいても、相手が誰であっても、人を好きになるって気持ちに違いがあるわけないですよね……。フィシスさん……本当にごめんなさい……」

そう言って、ぺこりと頭を下げるフィルデラを、フィシスは呆然として見つめた。

「そう……だよね？　ほんとうにそうだよね？　人を好きになることに、きまりなんかないよね？　みんな、ボクのことを変態だって言って、ルアークも迷惑そうにしてるから……。何度も、何度も、あきらめようと思ったけど、やっぱり、あきらめきれなくて。迷惑なのは解ってるのに、あきらめきれない自分が情けなくて……。ルアークを必要としている自分の心の弱さが嫌いで……。それでも……それでも、やっぱりボクはルアークのことが好きで……。この想い、あきらめる必要なんかないよね……。理屈じゃなくて、好きなんだから仕方ないよね？。ありがとう……君のおかげで勇気が出てきたよ。ボクはがんばるよ！　ルアークに振り向いてもらえるまで……」

フィシスは笑った……会心の笑みで。

しかし、それにつられて、にこっりと微笑んだフィルデラの笑顔を見て、少しだけその表情が翳った。

「だけど……君に勝つのは、無理だろうな……。君こそルアークにふさわしいと、ボクは思うよ。だから、もし君がルアークに選ばれたとしたら、ボクはきっぱりあきらめることができる。だから、君も頑張りなよ」

「フィシスさん……」

見上げたフィルデラの笑顔は、フィシスが一瞬見とれてしまうくらい、魅力的だった。

本当に……勝てるわけないよな……。

フィシスは、自分の心に敗北感が広がっていくのを感じていた。
しかし、なぜかその敗北感は、さわやかだった。
そして、その理由に……フィシスはまだこの時には、全く気付いていなかったのだ。

～幕間～

「きゃあ！　きゃあ！　きゃあ！　かわいい……かわいい！！　ぜぇったい可愛い！」

ハートマークをあたりにまきちらしながら、リ・セルテレシアは歓声をあげた。

「フィシスくん。待ってなさいよぉ。今すぐお姉さんが女の良さを教えに行ってあげるからね！」

今すぐにでも、向こうの世界に転移しかねない勢いのリ・セルテレシアを、イフェ・ラディアスは、必死に止める。

「リ・セルテレシア、冷静になってください！　今、あなたが向こうの世界に直接転移するような真似をすれば、大変なことになります。お願いですから自重してください」

「だって、だってぇ……。フィシスくんが待ってるのに……」

待ってない、待ってない！

「気のせいじゃないですか？」

皮肉げにそう言うと、彼女はぷくっとほほをふくらませた。

「いじわる！　……いいもん、すでに向こうに送り込んである“かけら”を使うから。これなら文句ないでしょ？」

そう言って、にっこりと微笑んでくださるリ・セルテレシアに、イフェ・ラディアスはまたもや頭を抱えた。

このままでは駄目だ。なんとか方法はないだろうか……。そうだ！　この策なら……。

イフェ・ラディアスは、リ・セルテレシアに向けて意味ありげな笑みを浮かべ、言葉を紡いだ。

「止めても無駄なようですね……。仕方ないですから助言させていただきましょう。リ・セルテレシア、彼に会いにいくなら、完全に失恋してからの方が良いですよ。いくら強がってもやはり落ち込むでしょうから、その時になぐさめてあげてください。あなたの優し

さで彼を包み込んであげれば、きっと心を開いてくれますよ」
「ラディアス君、賢い！　そうよね、確かに、それからでも遅くはないわよね……。解ったわ、もう少し様子を見ることにする……。フィシスくん。それまで待っててね！」
うふふふ♪
けばけばしい色彩の食虫植物が、いたいけな蝶を今にも捕えようとしている。
そんな光景が、イフェ・ラディアスの脳裏に浮かんでくる。
イフェ・ラディアスは静かに、フィシスの冥福を祈った（合掌……っておいおい）。

五章

もぞ……もぞ。
うんっ……。
もぞ……もぞ。
んっ？
胸もとに違和感を感じて、フィルデラはぱっちりと目を覚ました。
もぞ……もぞ……。
「きゃあああああああぁぁぁぁぁぁー」
凄まじいばかりの悲鳴が、あたりに響きわたる。
フィルデラ！
結局、寝付けずにいたルアークは、そのフィルデラの悲鳴を聞きつけると、素早くベッドから起き上がった。
その後のことは覚えていない。
気が付いたら短剣を構えて、フィルデラに割り当てられた寝室に飛び込んでいた。
「フィルデラ！　無事か！？」
部屋はフィルデラが造りだしたらしい光球で、明るく照らされていた。
フィルデラはベッドの上で、真っ赤な顔をしてうつむいている。
「あの……ごめんなさい……。やっぱり聞こえました？」
フィルデラは申し分けなさそうな表情をして、じぃっとルアークを見つめた。
悲鳴をあげてから、まだほとんど時間は過ぎていない。
ルアークにまた迷惑をかけてしまったと思う一方で、こんなにも速く、自分のために駆けつけてくれたことが、たまらなく嬉しかった。
「怖い夢でも、見たのか？」

ルアークの言葉に、フィルデラは小さく首を振った。
「違うんです……。この子が……」
フィルデラはそう言うと、自分の胸もとを指差した。
夜着の胸もとから、何か黒っぽい小さな生き物が頭を覗かせている。
「ぴゅい？」
生き物は、ルアークを見上げると、そのちいさな首を傾げてみせた。
「生まれたんだ！」
ルアークの言葉に、フィルデラはにっこりとうなずいてみせる。
「はい……」
「ディーフィルくん……。この人はルアークさんよ」
フィルデラがそう言うと、ディーフィルは挨拶するかのように、頭を下げる。
「よろしくな……」
「ぴゃーう」
ルアークの言葉に、ディーフィルも嬉しそうに返事？　をした。
ディーフィルのせいで乱れてあらわになったフィルデラの胸もとから、白桃のような胸のふくらみが無防備に覗いている。
ルアークは真っ赤になって、フィルデラの胸もとから目を逸らした。
「あの……ルアークさん……なにか？　……きゃっ！」
そのルアークの態度に、フィルデラはやっと、自分がかなりはしたない姿をルアークにさらしていたことに気付き、羞恥にほほを紅潮させ、自分自身を抱きしめるように胸もとを隠した。
「ぴゃう？」
ディーフィルが不思議そうに、そんなフィルデラを見上げる。
「ごめん……」
「いいえ……」
とくん……とくん……とくん……。

フィルデラの心臓が早鐘をうっている。
恥ずかしい。心が燃えだしそうなくらい、恥ずかしい。
「ルアークさん……驚かせてすいませんでした……。胸もとで、もぞもぞって何かが動いたので、私、びっくりしてしまって……」
「フィルデラ……」
フィルデラの肩に、そっとルアークの手が伸びる。
抱きよせようと、その手に力がこめられそうになったとき……。
「何があったの？　大丈夫！？」
「あほ！　でかい声だすな、せっかくエエとこやったのに……」
戸口の方から響く声に、思わずふたりは振り返った。
ふたりの冷たい視線にさらされて、気まずそうに立ち上がったディースは、したり顔で、こう言う。
「ルアーク。おまえってほんまに悪いやっちゃなあ、夜這いなんかしよってからに」
「だ……だれが！」
真っ赤になったルアークに、とどめをさしたのはフィルデラだった。
「あの？……“よばい”ってなんですか？」
「う……」
ディースは、狼狽するルアークを悪戯っぽい表情で一瞥すると、フィルデラの質問に答える。
「フィルデラちゃん。夜這いって言うのはな。今ルアークがやってるみたいに、夜、女の子の部屋にえっちなことをするために忍び込むことを言うんや」
ディースの言葉を聞いて、フィルデラは真っ赤になった。
「ルアークさんはあなたとは違います！　私が悲鳴をあげたのは、この子のせいです」
フィルデラは思わず声を上げ、胸もとからディーフィルをつまみ出す。
「ぴゅあうぅ」

ディーフィルは、お辞儀をするように、頭を下げてみせた。
「生れたんか！」
「はい」
ぱたぱたぱたぱた。
にっこりと微笑んだフィルデラの手を離れて、つたなげにではあったが、ディーフィルは、しっかりと羽ばたき、飛翔した。

※

「ぴゃう」
胸もとから顔だけ出して、可愛い声で鳴くと、ディーフィルは大きく口を開けた。
「まだ、欲しいの？」
フィルデラは野菜を切っていた手を休めると、既に切り分けておいた肉をひと切れつまんで、ディーフィルの口に放りこんでやった。
ぱくん。
「おいしい？」
んぱんぱんぱんぱ
固い肉を一生懸命、何度も何度も噛みしめている彼には、フィルデラの言葉も耳に入らないようだ。
さあ……今のうちに……。
たんたんたんたん
フィルデラの包丁裁きはなかなかのものだ、あっという間にかごいっぱいの人参をカットしてしまった。
「フィシスさん、馬鈴薯の皮、むけました？」
「もうちょっと……。馬鈴薯ってごつごつしててむきにくいから……」
そう言うフィシスの手付きは危なっかしく、馬鈴薯も、もうちょっとどころかまだ半分以上残っている。
「手伝うわ……」

フィルデラは馬鈴薯をつかむと、そっと包丁をいれた。
すすすすす……。
フィルデラの指が滑らかに動き、あっという間に馬鈴薯の皮がむかれていく。
「へえ……。器用なんだね……」
フィシスも不器用なわけではなかったが、どうも包丁や料理用ナイフを使うのは苦手だった。
フィルデラが四つむくうちに、ひとつむくのがやっとだ。
ナイフ投げの腕なら、かなり自信があるのだが……。
しかし、フィルデラが手伝ってくれたおかげで、みるみるうちに、馬鈴薯の山は減っていった。
んぱんぱんぱんぱ……ごくん。
「ぴゃう！」
やっとさっきの肉を飲み込んだディーフィルが、大きく口を開けてさらに食べ物をねだる。
「まだ、食べ足りないの？」
はっきり言って、もう、かなりの量の肉がディーフィルのお腹の中に消えている。
こんなに食べさせても、いいものなのだろうか？
フィルデラは少し不安になってフィシスにたずねる。
「こんなに食べさせていいのかしら？」
「う～ん……ボクには何とも言えないなあ。だけど、これ以上こいつに食わせたらボク達の食べる分がなくなってしまいそうだし、そうだ！　こいつ、野菜は食べないのかな？」
フィシスはそう言うと、フィルデラが止める間もなく、カットしてあった人参を、ディーフィルの口にほうりこんでしまった。
ぱくん……んぱんぱんぱんぱ……ごくん。
「ぴゃぁう」
「なんだ……野菜も食べるじゃん。それじゃあ。これは食べないかな」

今度は馬鈴薯の皮をまるめて、ディーフィルに与えてみる。
ぱくん……んぱんぱんぱんぱ……ごくん。
「びえええ～」
いくらなんでも今度は気にいらなかったらしい、飲み込んだ後で、心底嫌そうな顔をしている。
「へへへへ、意地汚いからそういう目にあうんだよ」
フィシスは、そう言って、悪戯っぽく微笑んだ。
「もう、フィシスさん、やめてください！　かわいそうに……。酷い目にあったわね……」
「ぴゃうあぅ」
フィルデラが頭をさすってやると、ディーフィルは甘えるように鳴き、フィルデラの胸もとにもぐりこんでしまった。
「あんまり、甘やかすのは良くないよ。たまにはびしっといかないと。こいつって、結構、根性悪そうだし……」
「そんなことないわよね？」
「ぴゃう」
フィルデラの言葉にディーフィルは、ちょこんと胸もとから頭を出して小さくうなずいた。
「そうかなぁ……。こいつ、なんだかいやらしい目つきしてるじゃん」
「そんなことないわよ……。ほら、こんなに可愛いのに」
そう言ってフィルデラは、胸もとからディーフィルをつまみ出した。
ディーフィルは、ぱたぱた、と飛翔してフィシスの胸に飛び込む。
「ぴゃう」
数秒の間はフィシスにおとなしく抱かれていた……が。
何か、もの足りなさそうな表情を浮かべ、前足でぺんぺんとフィシスの胸板を叩くと、胸と顔を見比べるように頭を上下させた。
「おまえ……何が言いたいんだ？」
「ぴゃおぅおぅ」

ディーフィルは馬鹿にしたような顔（少なくともフィシスにはそう見えた）で鳴くと、フィルデラの方へ舞い戻ろうとする。
「やっぱりこいつ、絶対、性格悪いよ！　おまえみたいな奴はこうしてやる！」
げしっ。
「びぇぇぇ」
ディーフィルはほうほうの体で、フィルデラの方へ舞い戻ると、素早く胸もとにもぐりこんだ。
「きゃう……。きゃう」
甘えるように鳴きながら、フィルデラの胸にすりすりと頭をすりつけている。
「フィシスさん！　こんな小さな子をいじめて、何が楽しいんですか！」
フィルデラは眉根をよせて、フィシスを睨む。
「いや……だって……」
フィルデラに怒られて口ごもるフィシスに、ディーフィルは勝ち誇ったように鳴いてみせた。
「ぴゃうわぁぅ」
やっぱり、こいつって絶対、根性悪い……。
フィシスは小さく、ため息をついた。

※

「フィルデラちゃん……。サイズもだいたいちょうどエエみたいやし。その服、なかなか似合てるで」
昨日の夜着も、この服も、たったひとつの部分をのぞいて、あつらえたようにぴったりとフィルデラの身体にフィットしている。
ただ、胸周りだけが、かなり余ってしまっていた。
まあ……ディーフィルのもぐりこむ隙間が出来て、ちょうど良かったと言えばちょうど良かったのだが、フィルデラとしては少しば

かり……いや、かなり、悲しかったりする。
「はい、ありがとうございました。ですけど、この服、どなたのものなんですか？」
「それはエメラークが着てたものや……。部屋のタンスに、ほかにもぎょうさんあるからフィルデラちゃんが自由に着てエエよ……。着替え持ってへんのやろ？　フィルデラちゃんに着てもらえたら、エメラークも喜ぶやろし」
　ディースはそこまで言葉を紡いで、フィルデラが不思議そうな表情をしていることに気付き、その疑問に答えた。
「……あ、そうか……フィルデラちゃんはエメラークの本来の姿しか知らなんだんやな。竜はな、人の姿もとれるんや。街中では、あんなでかい図体さらすわけにはいかへんやろ？　そやからここではずっと人の姿をとってたんや」
「そうだったんですか……」
「部屋も、自由に使てエエからな。何も気兼ねする必要はあれへんで。ただし、組織の関係で人の出入りはあるから、正体ばれんように注意するんやで」
「はい……ですけど……ディースさん。本当にいいんですか？」
「なにがや？」
「昨日、私に髪を染めさせた時、おっしゃってましたよね。私が側に居るだけでルアークさんに御迷惑がかかるって……。私、本当にルアークさんの側に居ても構わないんでしょうか？」
　必死な面持ちで言いつのるフィルデラに、ディースは優しく微笑んでみせる。
「迷惑ぐらい、いくらでもかけたったらエエ。フィルデラちゃんを連れ出して来たんはルアークなんやから、あいつにはフィルデラちゃんを護る義務があるんや」
「違うんです……私の方からルアークさんに、連れて行って下さいって頼んだんです。ディースさんは誤解してらっしゃいます」
「そうやとしてもルアークの責任はなくなれへん。フィルデラちゃ

ん、今、ここから追い出されたとして、ひとりで生きていけるか？」
「……それは……」
神殿を出て、その後どう生きていくのか？
何よりも先に考えねばならなかったはずのことだ。
それなのにフィルデラは、そのことについて、なにも考えてはいなかった。
漠然と、何とかなる、と思っていただけなのだ。
そして、何とかなるはずがなかったことを、今はっきりと理解している。
それが、何とかなってしまったのは、ルアークのおかげなのだ。
ルアークに出会わなかったとしたら、いったい、自分はどうなっていたのだろうか？
「…いえ」
「せやろ？　ルアークかて十分そのことは解ってたはずや。それを引き受けたって言うことは、きっちり責任とる覚悟が出来てたっていうことや。違うか？」
「そう……かもしれません……。ですけど……」
フィルデラには、ルアークにそれだけの負担をかけさせるだけの価値が自分にあるとは、決して思えなかった。
今のフィルデラにとってルアークは、すべてにおいて必要不可欠な存在になってしまっていたが、彼にとって自分は、足手まといの厄介もの以外の何者でもないはずなのだ。
悲しげにうつむいてしまったフィルデラに、ディースは優しい表情で微笑みかける。
「フィルデラちゃん。ルアークもフィルデラちゃんを必要としてるで。あいつには、背中に庇う誰か、が必要なんや。背中に誰かを庇ってこそ、あいつは本当の強さを発揮できる。誰かを護らなければならないという気持ちが、逆に心の支えになるんや。背中に庇った相手に、実は逆に支えられてるんや。フィルデラちゃん、ルアークを支えてやってくれんか？　あいつにはフィルデラちゃんが必要な

んや……」
『あの子の憎しみを、あなたの愛で、中和してあげてください。あの子には、あなたが必要なんです。あの子の孤独な心には、愛するものが必要なんです……』
ディースのその台詞に、エメラークのあの最後の言葉が重なる。
本当にそうだろうか？
本当に、ルアークは自分を必要としてくれているのだろうか？
本当に、そうであったなら……
「せやから、フィルデラちゃん。ルアークの側に居ったってや」
そのディースの言葉に、フィルデラは小さく、うなずいた。

※

（ルアークは、今日もフィルデラと一緒なんだ……）
ちりちり……。
胸が痛む。
フィシスはため息をつくと、手に持ったナイフを的へと投じた。
しゅっ。
風切る音をたてて、狙いあやまたず、ナイフは的の中心へと突き刺さる。
的に突き刺さった衝撃で小刻みに震えるナイフの柄を見つめながら、フィシスは再びため息をついた。
フィルデラが現れてからすでに一週間が過ぎている。ルアークは彼女に対して、大切に、大切に、まるで壊れ物でも扱うかのような態度で接していた。
フィシスはすぐに気づいた。ルアークがフィルデラに対して特別な感情を抱いていることに。
そして、フィルデラがルアークに恋していることはあからさまだ。あの、表も裏もない純真な少女は、心の底からルアークを慕っているのだ。

（それなのにルアークってば！）
あの甲斐性無しは、フィルデラの想いを、そして自分自身の感情を、故意に無視しているのだ。
ルアークへの未練をきっぱり断ち切りたいフィシスとしては、苛立たしいことこの上ない。
（あんないいコ、他にいないのに……。ルアークってば、いったい何考えてるんだか……）
ほんとに、そうだ。
幼いころにその容姿をねたまれて、同年代の少女たちに苛められたフィシスは、深刻な女性不信に陥っていた。
しかし、表裏なく、どこまでも真っ直ぐで、素直なフィルデラは、自分を苛めた少女たちとは全く違っていた。
彼女になら、ルアークを任せられる。そう思っているのに……。
きゅっ……。
胸が苦しい。
（くそ……。ほんとにルアークってば……）
ルアークが憎たらしくてたまらない。
あんないいコにあそこまで想われて、何の不満があるというのだろう。
そのとき、にっこりと微笑むフィルデラの面影がフィシスの脳裏に浮かびあがってきた。
（あれ？）
恋敵……のはずだった。
誰よりも憎たらしい相手のはずだった。
それなのに……。
再び、フィルデラの面影が脳裏に浮かぶ。
今度はちょっと怒ったような表情。
つんと尖らせた唇が、可愛い……と思う。
（あれ？）
乱れに乱れた自分の心を整理して導き出された結論に、フィシス

は思わず呆然となる。
（ボク……。ボク……。もしかして……）
相思相愛のカップルの双方に恋愛感情を抱いてしまったあわれな少年は、思わず頭を抱えると盛大にため息をついた。
※
港近くの市場から3人連れの男女が家路を急いでいた。
そのうちのひとり、両手いっぱいに荷物を抱えた青年が、頭の上に手を組んで鼻歌を歌いないながら隣を歩く青年に問い掛けた。
「ディース。どうして俺がすべての荷物を持たなければならないんですか！？」
荷物を持った青年……ルアークの言葉に、ディースはお気楽な口調で返答する。
「当然やないか。フィルデラちゃんに荷物持たせるわけにはいかんやろ？」
「そうじゃなくって……。どうしてあなたは荷物を持たないんですか！！」
「わいは頭脳労働専門やからな。肉体労働はお前の管轄や」
しれっとして答えるディースを横目で睨みつつ、ルアークはため息をついた。
「あの……ルアークさん。やっぱり、私も荷物お持ちしましょうか？」
フィルデラが気を利かせてそういうが、ディースが横からきっぱりと断る。
「フィルデラちゃん気にせんでいいで。買い物の荷物持ちが男の仕事やゆうのは、太古からの決まりごとやから」
結局、ルアークがすべての荷物を持つという結論に達したようだ。
「そやフィルデラちゃん。ディーフィルの奴はどうしとる？」
「よく寝てますよぉ……。さすがに、あれだけたくさん食べたらお

腹いっぱいになったみたいですね」
　屋台で買ったヤキトリなどをたらふくお腹に入れたディーフィルは、フィルデラの胸に抱かれてすうすうと寝息を立てていた。竜と言っても生まれたてのディーフィルは、飛びトカゲとほとんど変わりない外見をしている。飛びトカゲはペットとして一般的なので、連れ歩いても怪しむものはいなかった。
「フィルデラ。そうだ。ディーフィルについてひとつ聞きたいことがあるんだ」
「なんですか？　ルアークさん」
「そいつの父親について、きみはエメラークから何か聞いていないか？」
　ルアークの質問に、フィルデラは目をぱちくりする。
「ディーフィルくんの父親……ですか？」
　言われてみればそのとおりだ。子どもがいると言うことは父親がいるはずだという当たり前のことに、フィルデラは今初めて気がついた。
「きみも知らないのか？」
「はい……エメラークさんは何もおっしゃいませんでしたから……。ルアークさんには、何か心当たりがあるんですか？」
「あるには、ある。が、しかし……」
　そう言って、ルアークは意味ありげにディースの方を見る。
　この話題が持ち上がったときからそわそわと落着かなかったディースは、ルアークの視線を浴びてあからさまに狼狽する。
「ルアーク。わいは知らんで。エメラーク以外に竜の知り合いなんか居てへんからな。それに、今更そんな昔のことほじくり返してどないするんや。エメラークかてフィルデラちゃんに父親のことは言わへんなんだんやろ。人には……まあエメラークは竜やけど……知られたくないことって言うもんがあるんや。詮索するんは良くないで」
　必死に取り繕うディースの態度を見て、ルアークは自らの推理に

対する確信を深めた。
子どもに名前を付けるとき、親の名前の一部を譲るのは、ごく一般的な風習だ。
息子なら、父親の、あるいは祖父の名前から。娘なら母親の、あるいは祖母の名前から。
竜の間でも同じような風習があることを、ルアークはエメラークから聞いていた。
ディース、そして、ディーフィル。
この二つの名前は“ディー”という部分が共通している。
このことが持つ意味は……。
「ディース……」
さらに追及しようと口を開いたルアークを、路地から突然現れた男が遮った。
「ディース！　ルアークも居たか。ちょうどよかった」
「どないした？」
ディースに話しかけて来た男はルアーク達が所属している組織の一員だった。男はかなり狼狽しているようだ。
「西の支部の奴らが暴走したらしい！　内俗都の牢獄を破ろうとして、そして……」
「捕まったんやな？」
ディースの言葉に、男は深々とうなずいた。

～幕間～

神界と人界のはざま。そこに設けた特殊な空間にリ・スファノアは居た。
そして、彼の目の前には、十数人の人間が連れ込まれていた。
その人間たちの誰もが、髪や瞳に暗い色を宿しており、彼らが光よりも闇に近しい存在であることは明らかだった。
恐怖に目をみはりながら、人間たちは自分たちに相対する金髪碧眼の偉丈夫を見上げる。リ・スファノアは、自らを畏れる哀れな人間たちに、慈悲深い微笑みを浮かべてやった。
「お前達はこれから我が力となる。ありがたく思うのだ」
スファノアは表情を皮肉げに歪めて、さらに言葉を継ぐ。
「さあ闇輝石よ、この者達に巣くう闇の力を吸い尽くせ！」
そう言い放つと、リ・スファノアは右手に持った石を高々とかざした。
「ぎひぇー」
「ぐはあぅー」
断末魔のような悲鳴が、人間たちからあがる。と同時に、力の波動が人間たちから石へと吸い上げられていった。
石は、闇の力を人間たちから吸い込めるだけ吸い込むと、貯えた闇の力を光へと捩じ曲げ、リ・スファノアに向けて解き放つ。
まばゆい、しかしどこか歪んだ輝きをあげながら、光は奔流となってリ・スファノアに吸い込まれていった。
「くくく。貴様たちの闇の力は確かにいただいた。これは返礼だ！」
今度は逆に、リ・スファノアの身体から光が放たれ、蛇のように人間たちの身体にまとわりついた。
その『光の蛇』は、人間達に残った光の力を食らい自らと同化させると、抜け殻になった人間たちへと入り込んでいく。
「成功だ！　ようやく成功したぞ！」

さきほどまでの恐怖の表情とは打って変わった能面のようなうつろな表情で、人間たちはリ・スファノアを見返した。
魂から闇の力を吸い尽くされ、代わりにリ・スファノアの光を植え込まれた人間たちの髪は、金色に染め変えられている。
しかし、同じく光にあふれた存在であっても、フィルデラの持つような清冽さはかけらもない。それらはまがまがしい、歪んだ存在でしかありえなかった。
リ・スファノアは、自らの下僕と化した人間たちの頭脳から記憶を引きずり出して検分を始めた。
「人の子の分際で、我に刃向かおうとするとは。小憎らしいやつらだ……」
彼らは『反神同盟』と称する、リ・スファノアに反抗する組織に所属していたのだ。自らに向けられた憎悪の記憶が、その頭脳には残されていた。
「ん……これは？」
彼らの記憶の中から思わぬ情報を発見して、リ・スファノアは表情を輝かせる。
「このようなところにあの『闇の御子』は潜んでいたのか。ちょうどよい。暗黒竜の力をも光に変えるこの闇輝石で、こいつの力も食らってやる！」
リ・スファノアは高らかと宣言すると、“浄化の奇跡”を神官たちに見せつけるために、魂を乗っ取り下僕と化した人間たちを連れて、人界へと跳んだ。

※

「ラディアス君。大変よ！」
突然空間を裂いて、リ・セルテレシアが転移してくる。
「なんですか？」
珍しく慌てたような表情のリ・セルテレシアに、イフェ・ラディ

アスは訝しげな表情を向ける。
「ラディアス君、何、のんきに構えてるのよ。ほんとに大変なんだってば！」
そう言いつつ、リ・セルテレシアは、イフェ＝ラディアスの首根っこをつかんで、がくがく揺らしてくれたりなんかする。
「ですから！　何が大変なんですか」
「だぁから！　スファノアのバカが、とんでもないことやらかしてくれたの！　あいつ、人間の魂食らって自分の力を高めてるのよ！　最終的にはデルシス中の人間すべてを食らうつもりよ。このままじゃ、あいつ、凄まじい力を手に入れることになるわ！」
「どうして、そのことを……」
イフェ・ラディアスの口から思わず漏れた言葉を、リ・セルテレシアが聞きとがめた。
「あなたもしかして、スファノアがこんなとんでもない協約違反を始めるの知ってたの？」
神同士の協約で、知性を持つ生物の魂から力を得ることは禁止されている。リ・スファノアはその協約を完全に破ったのだ。
「リ・セルテレシア。彼が協約違反を行っているのは、あなたもご存知だったはずです。スファノアはすでに竜の魂さえ食らっているのですよ」
「あ……」
そう言えば、そうだ。知性を持つ生物は人間だけではない。一般的に竜のほうが人間よりも知性が高いのだ。当然、竜の魂から力を得ることも協約違反になる。
「だけど、変だわ。スファノアの属性は私と同じく“光”よ。“光”と“闇”双方の属性を備えた人間と違って、“闇”の属性しか持たない暗黒竜の魂から力を得ることなんてできないはずなのに……」
「リ・セルテレシア。スファノアは闇の力を歪めて、光の力に変換する魔石を手に入れたのです。奴はそれを“闇輝石”と、呼んでいますが……」

「そっかぁ。それであんな芸当ができたのね……。人間の魂から闇の属性だけを取り出して、魂を食らいつつも自分の傀儡に変えるなんて……」
「あんな芸当って、まさか実際にご覧になったんですか？」
「ええ。あの世界にある“かけら”を通してだけどね。ルアークくんたちが所属してるスファノアに反抗してる組織があるでしょ？あそこの構成員、仲間を牢から救い出そうとして捕まったの。そうしたら、いきなりスファノアが降臨してきて、そいつらを浄化するって、どこかに連れ出したの。そして戻ってきたら、スファノアに魂を乗っ取られた傀儡になりはててたってわけ。闇の属性を吸い取られて、スファノアから光を植え付けられてるから、そこらへんのアホ神官達には、ホントに浄化したように見えたのよね。もう奇跡が起こったって大騒ぎで……。私もびっくりしちゃって……」
「それで、ここに飛び込んできたってわけですか……」
冷静にそう答えるイフェ・ラディアスに、リ・セルテレシアはぷくっと頬を膨らませてみせる。
「もう、ラディアス君。知ってたのなら、教えてくれたってバチあたらないのに……。まあ、あなたの計画どおりにコトが進んでいるなら、私はなにも文句ないけど……」
「計画ってほどのことでもありませんけどね……。とにかく、ルアークとフィルデラが出会った以上、スファノアとの決戦の準備は整のいつつあるといえるでしょう。頃合いを計らって、ルアークたちをうまく導き、スファノアと対決させましょう」
「ちょっと……ラディアス君。頃合いを見計らってなんて、なんでそんな悠長なこと言ってるのよ！」
リ・セルテレシアの台詞をきいて、イフェ・ラディアスはいぶかしげな表情をして尋ねる。
「悠長……とは。どういうことですか？」
「もしかして、知らなかったの？　あいつ、傀儡にした反神同盟の構成員から、ルアーク君の情報を引き出すことに成功したみたいな

の」
　イフェ・ラディアスが知らない事を自分が知っているなんて滅多にない。リ・セルテレシアはここぞとばかりに優越感をむき出しにする。
「馬鹿な。ルアークにはきっちり防御術をかけておいたはずだ。スファノアごときに俺の術を破れるはずが……」
　思わず呆然となって呟いたイフェ・ラディアスに、リ・セルテレシアは嬉しそうに追い討ちをかける。
「もちろん、直接見破ることは無理でしょうね。だけど、人間の記憶を媒介にした間接的な接触にまで対策施してた？」
「そうか。しまった……」
「うふふ。もうラディアス君ってば、しっかりしているように見えて結構ぬけてるんだから……」
　あなたにだけは言われたくない！　そう思ったものの、実際に失敗を犯してしまった以上、負け犬の遠吠えでしかない。
「で、どうするつもりなの？　スファノアにばれた以上、のんびりしてはいられないわよ？　すでに俗都の封鎖令がだされたわ。今夜にも神殿騎士団と自警団が反神組織の各拠点に踏み込み、ルアークくん達を捕縛する手筈になっているのよ」
「くそ……思った以上に動きが早い！」
　ちっ、と舌打ちしたイフェ＝ラディアスに、リ・セルテレシアは笑いかける。
「安心して。すでに私のほうで対策は考えてあるから」
　リ・セルテレシアのその発言を聞いたイフェ・ラディアスの表情が凍りついた。
　リ・セルテレシアの考えた“対策”など、あてになるはずがない。
　しかし……、この場はそのあやふやな“対策”に頼るしかないのだ。
「だいじょぶ。だいじょぶ。大船に乗ったつもりで安心してちょうだい」

泥船で航海に乗り出すほうがまだ安心できる！　心の中でそう叫びつつ、イフェ・ラディアスは唇を噛み締めた。

※

複数存在。

力のある神なら誰もがそれを行なうことが可能だ。

自らの力を“かけら”として分かち、その“かけら”に自らの意識の複製をまとわせる。

そうして、自分と全く同じ精神構造を持った存在を、造りだすことが可能なのだ。

しかし、それは完全に自分と同一の存在ではない。

同じ構造をしていても、意識は同一のものではない。

あくまで、自分と同じ精神を持った“別人”なのだ。

だが、唯一、例外が居た。

すべての神を統べる、光主女神リ・セルテレシア。

彼女はひとつの意識で複数の身体を制御することができたのだ。

彼女との力の差。

イフェ・ラディアスは、目の前に展開しているわけ解らない状況に、それを痛感させられないわけにはいかなかった。

「きゃあぁ。何だかおもしろい！　やっほぅ……ラディアス君。見てる？」

そう言って、幻像の向こうから、テレシアが手を振ってくる。

「自分の視界に自分が居るってなんだかとっても変な感じよね」

そう言って、リ・セルテレシアが、首を傾げてみせる。

対策は考えてあるわ。大船に乗ったつもりで安心してちょうだい。

リ・セルテレシアに、そう言われて、財務管理長“テレシア”の居室に、幻像の視点を移したのだが……。

コンコン。

ノックの音。

向こうの世界から、それが、幻聴としてこちらの世界に響いてきた。
「はい、どうぞ入って……」
そう言ったのは、こちらの世界にいる、リ・セルテレシア。
「あっ……間違えちゃった……」
そう言ったのは、向こうの世界のテレシア。
イフェ・ラディアスは、こめかみのあたりに疲れを感じて、思わずバランスを崩し椅子にへたり込んでしまう。
「「ちょっとしたミスじゃない……。ラディアス君。そうまでして呆れなくでもいいのに……」」
ふたりのリ・セルテレシアは、同時にぷくっとほほを膨らませ、ステレオでイフェ・ラディアスに文句を付けた。
たまにとんちんかんな、わけ解らない返答をすることがあると思ったら、こういうことだったんだな……。
イフェ・ラディアスは呆れながらも、幻像へと視線を移し、その後の展開を待った。
コンコン。
もう一度ノックの音がする。
「どうぞ、入ってください」
テレシアがそう言うと、扉が、きしんだ音を立てて開かれた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8505z/

光と闇のはざまに

2011年12月31日02時50分発行